

Ministry of Land, Infrastructure,
Transport, and Tourism

国土交通省

内定者パンフレット

総合職事務系 2026



ご覧いただき、ありがとうございます。
皆様の就職活動が実りあるものになりますように。
いつかお会いできる日を、内定者一同楽しみにしております！

目次

1 国土交通省の官庁訪問 pp.03-16

1-1 内定者の官庁訪問当日

1-2 内定者の官庁訪問準備

～試験から官庁訪問まで何をしていたの？～

【コラム】教養区分対策について

【特別企画】内定者37名の「あなたを最も表している一枚」

【特別企画】国交省写真館

2 内定者ってどんな人？ pp.17-50

2-1 内定者基礎データ

2-2 内定者の就活体験記

3 官庁訪問を乗り越えるために！ pp.51-59

3-1 【特別企画】採用担当者×リクルーターインタビュー

3-2 官庁訪問エピソード集

4 国土交通省の魅力 pp.60-64

4-1 内定者が思う、国土交通省の魅力

4-2 執筆担当者が思う、国土交通省の魅力

① 国土交通省の官庁訪問に関する情報を提供すること、

② 官庁訪問までの過程を多様かつ具体的に示すことで、ロールモデルの1つとして皆様の一助となれることの2つを主軸に当パンフレットを作成しました！

そのほか、国土交通省の魅力や内定者の雰囲気をお伝えできれば幸いです。(作成責任者)

1

国土交通省の 官庁訪問



1. 内定者の官庁訪問当日 【コラム】

- 官庁訪問当日のプロセス・・・・・・・・・・ p.4
- 官庁訪問中の過ごし方・服装や持ち物・・・・ p.5
- 地方組の官庁訪問・・・・・・・・・・ p.6
- 教養区分対策について・・・・ pp.12~13

2. 内定者の官庁訪問準備

－試験から官庁訪問まで何をしていたの？－

- 統計データ・・・・・・・・・・ p.7
- 最も印象的だった採用イベント・・・・ p.8
- 内定者からのアドバイス（準備編・当日編） pp.9~11

国土交通省の官庁訪問

官庁訪問当日のプロセス

2025年度官庁訪問 6月11日～6月23日

リクルーター一面談

1日のはじめにリクルーターと行います。
官庁訪問のアイスブレイクと捉えてみてください！
原課訪問で聞きたい政策分野について問われたり、緊張をリラックスさせてくださったりします。

原課訪問

所要時間は1時間程度で、各政策分野で働く職員さんと課室等で行います。これまでのキャリアや政策の説明を受け自身の考えをアウトプットしていきます。
非常に多くの職員さんと密にコミュニケーションを取ることができたり、政策やキャリアなどについて深く理解できたりと、有意義な時間だったという感想が内定者から寄せられています。

人事面接

一般的な面接で、志望動機やガクチカなどが問われます。人事課の職員と行き、エントリーシートの内容はもちろん、それ以外にも幅広く質問がなされます。

出口面接

最後に行われ、リクルーターと1日の振り返りを行います。1日の評価が伝えられます。

リクルーターとは・・・？

官庁訪問中に学生全員に割り当てられ、全クール通じてお世話になる若手職員。
リクルーターの方は、1人あたり複数の訪問者を担当しているようでした。
非常に親身になって寄り添ってくださる存在です。



官庁訪問期間中の過ごし方

待ち時間の過ごし方

内定者の多くは、同席する他の学生と雑談をするほか、人事面接や原課訪問の振り返りをして過ごしたようです。振り返りの中で、自身の考えがどのように変わったか、どのような気づきを得られたかを考えると良いでしょう。

一方で、様々な情報が出回る中であっても自分のペースを保つことが重要という意見や、気分転換をする時間をとっていたという意見も内定者から寄せられました。

休日の過ごし方

趣味や友人との食事、睡眠などしっかりと休息をとった内定者が多数でした。地方から官庁訪問に臨み、休日は帰省や観光を楽しんだ内定者もいました。

一方で、前クールの振り返りと次に向けた準備を行った内定者も、地方公務員試験を受験した内定者もいます。

長丁場なので無理のない範囲で、後悔のないように過ごしましょう！

服装や持ち物

持ち物について

- ✓お菓子やゼリーなど短時間でも食べられるもの
- ✓扇子やハンディファン
- ✓名刺入れ
- ✓（折りたたみ式ホルダー付きの）メモ帳、バインダー
- ✓パソコンやiPadや本
- ✓面接で伝えたいことをまとめたメモ
- ✓過去の採用イベントで使用したメモ帳（過去の自分の考えや印象に残った振り返りが出来たほか、心の支えにもなった）

（その他の意見）

・人事面接や原課訪問のため移動するよう突然声がかかるため、持ち物をコンパクトにまとめられる荷物量にしておく良かった。

・移動が多いため、必要最低限の荷物量で臨むと良い。必要なものは、休憩時間にコンビニで調達できる。

国土交通省の官庁訪問

服装について

ジャケット・ネクタイの有無や長袖・半袖については、着用を求められた場面はなく、多くの学生がクールビズで面接に臨んでいました。自分がベストな状態で臨める服装が良いでしょう。また、体温調整ができるよう準備もしておくとう安心です。一方で、清潔感（服のシワ、革靴の綺麗さなど）も重要です！

アンケート結果(回答者34名) ×

ジャケットについて

着用（面接時のみ着用を含む）・・・16人
持参したが着用せず・・・12人
持参しなかった・・・6人

シャツについて

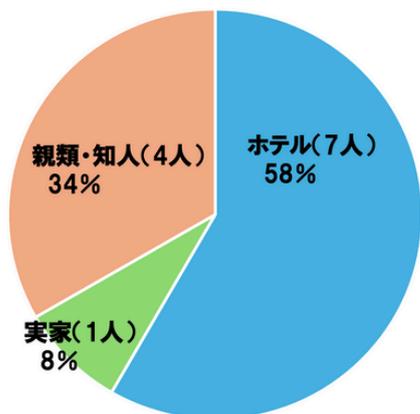
長袖・・・30人 半袖・・・3人 七分袖・・・1人

地方組の官庁訪問

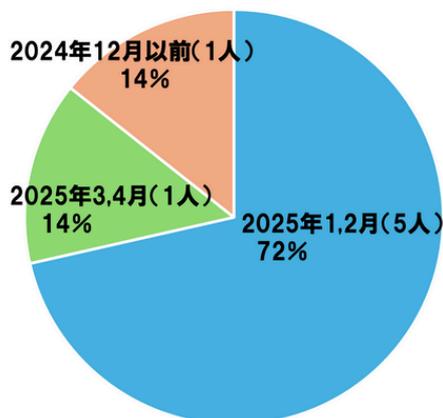
地方からの官庁訪問：12人

首都圏からの官庁訪問：22人（※回答者34名）

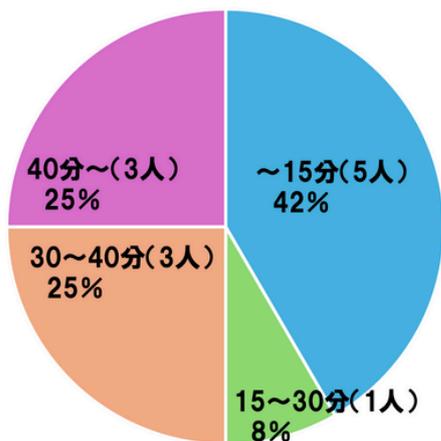
宿泊場所



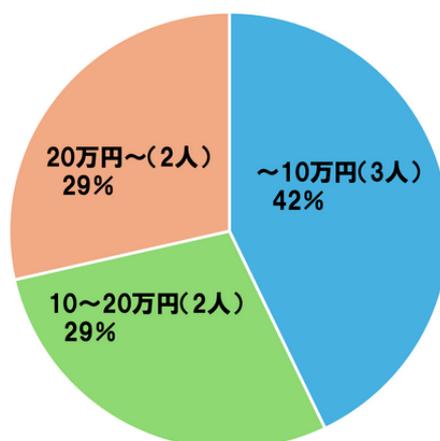
ホテル宿泊者の予約時期



宿泊先からの所要時間



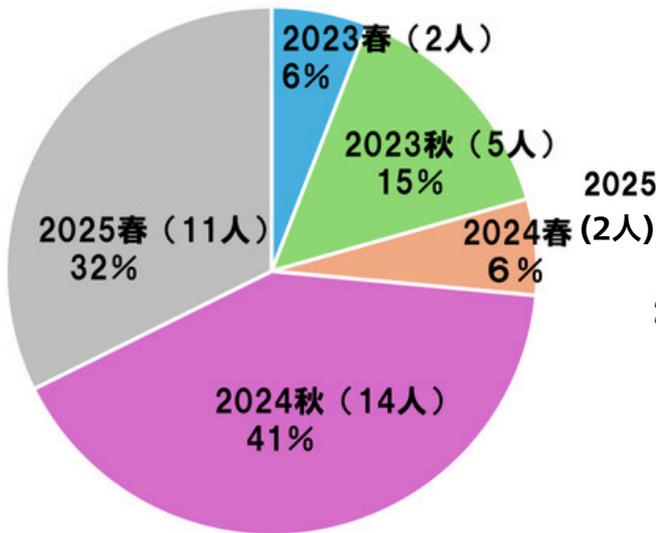
滞在費用



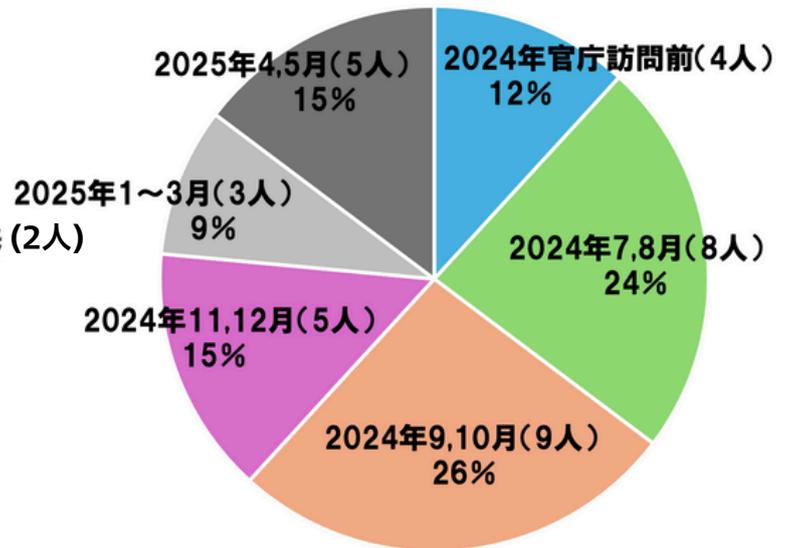
試験から官庁訪問まで どんな準備をしていたの？

内定者アンケート結果

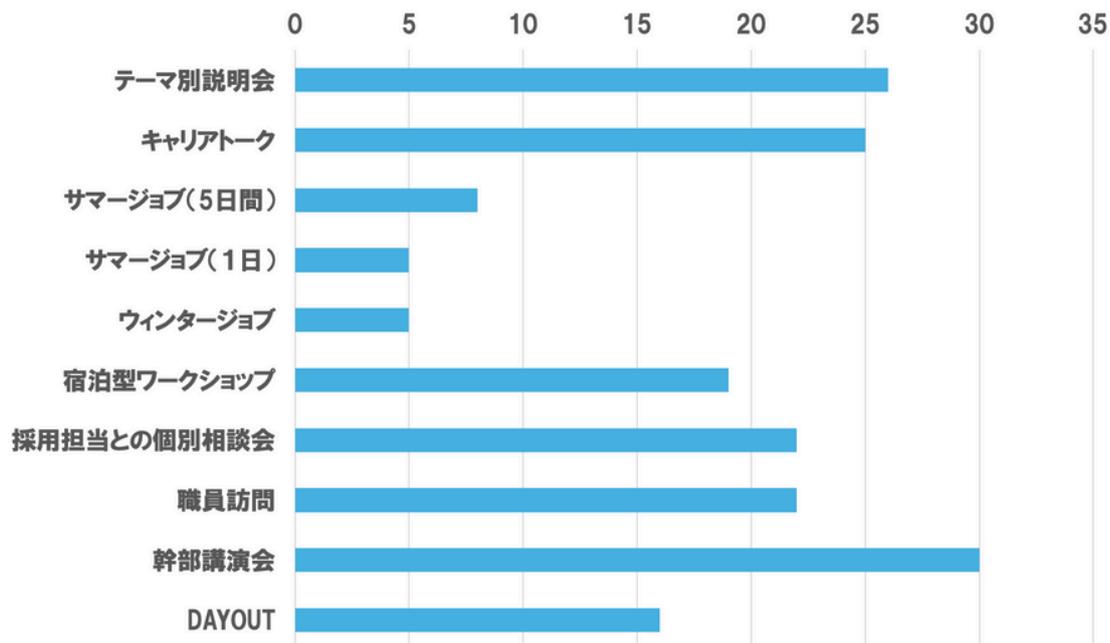
試験の合格時期



採用イベントへの参加開始時期



参加したイベント(複数回答可)



国土交通省の官庁訪問

最も印象的だったイベント

サマージョブ(8,9月)

38%が参加

- 現場視察や議論を通じて、所掌する政策についての知識を根っこから理解でき、全身で国交省の魅力を感じることができたため。

宿泊型WS(2,3月)

56%が参加

- 学生や職員の方々と交流する機会が多く、将来の同期や職員さんの雰囲気を知ることができたため。
- 泊まりがけて、同じような想いを持っている仲間と様々なことについて深く議論できたことが楽しかったため。

Day Out(4月ごろ)

47%が参加

- 現場の見学を通じて、国交省が持つ業務内容の面白さや多様性を感じることができたため。
- 自治体や事業者から見た国交省の姿を知ることができ、なぜ国で働きたいのかを見つめるきっかけになったため。
- 政策の最前線を見ることができ、貴重な機会で、ワクワクしたため。

幹部講演(5月ごろ)

89%が参加

- 過去の経歴の具体的なエピソードを聞き、仕事への情熱や人柄に感銘を受けたため。
- 国交省が所掌する業務の幅広さや具体的な職務のイメージを感じることができたため。

職員訪問

65%が参加

- 原課の職員の方とお会いでき、リアルな国交省を知ることができたため。
- 実際にどんな方が働いているかを知る機会で、こんな人と働きたいと思ったため。

その他

- 採用担当との個別相談会：65%が参加
- 大学生協主催のイベント

内定者からのアドバイス(準備編)



採用担当：高橋さん

採用イベントについて

- 国交省含め多くの省庁の説明会に参加することで、省庁ごとのカラーや雰囲気を知ることが出来る。また、自分が本当にやりたいことや国交省への志望理由を明確にすることが出来た。
- 対面の採用イベントに参加したことで、官庁訪問先の省庁の雰囲気を掴めた。また、官庁訪問対策や情報交換をする繋がりを持つことができた。

志望動機について

- 早い段階から志望動機の概要を考え始めておけば良かった。
- 具体的な政策分野への動機も重要だが、より根源的・抽象的な国土交通省への志望動機をまとめておくようにする。
- 省庁の大きな方向性を理解した上で、自分はどのくらい貢献できるのかを考えてみる。

国土交通省の官庁訪問

面接対策について

- 政策知識の多寡より、いかに熱量を持って、等身大で言葉にできるかが勝負。
- 心配性な方は準備をほどほどに、等身大が一番重要！
- 民間企業の選考や、OBOG訪問などによる社員・職員訪問、あるいは友人、他の志望者との面接練習をすることで、面接慣れすること。
- 対人の面接練習では、録画して後で見返し、自分が伝えたいことをうまく言葉にして話せているか、不自然であったり、不快な仕草や話し方をしたりしていないかをチェックしていた。
- (リクルーター面談で)原課訪問でどの政策分野の話を知りたいかの希望は、予めしっかり考えておくこと。

直前期・当日について

- 官庁訪問の流れをイメージして、必要な持ち物を考えると、忘れ物が少なく臨めると思う。
- 訪問の数日前から、当日のスケジュールに合わせて早寝早起きしておくこと、体調管理が容易になる。
- 当日自分の全力を出せるように努めること。前日や前クールを引きずりすぎないこと。

内定者からのアドバイス(当日編)

自然体で、リラックス！

- 待機時間が長くなる可能性もあるため、雑談、昼寝、振り返りなど、周りのことは気にせず好きなように時間を使うことが大切だと思います。
- 時間や身だしなみに注意を払い、心に余裕を持つことを意識するとよいと思います。
- 将来の同期になるかもしれない周りの仲間ともぜひコミュニケーションをとってください。
- 前の日に回った官庁のことは忘れて、目の前のことに集中することが大事だと思います。

原課訪問・人事面接

- 背伸びをしても見抜かれます・・・！笑
- 当然緊張はするかと思いますが、素の自分で、自然な会話を心がけて楽しむ心を持ちながら臨むといいと思います。本心をアウトプットしてみてください。
- 沢山の方々と話すため、全員から何かを学ぶ姿勢で臨んだため、成長出来たと感じています。
- 原課訪問するごとに振り返りを行うことが重要だと感じた。私は、面接で聞いたお話の中で、どの点に興味を持ったのか、自分の志望動機や関心分野とどのように繋がっているのかをまとめて、次の面接までに自分の言葉で説明できるようにしていた。当日は、それまでの原課訪問でどのような話を聞いたのかについて聞かれることが多かった。
- 原課で聞いた話を元にして、自分の国交省への志望度や印象がどう変わったかを人事面接で伝えられるようにしていました。
- 原課訪問は知らない政策の話を知ることや職員の方とお話できることは貴重。楽しんで！
- 自分はリクルーターの人にも官庁訪問で何を目的に来たのか達成できているのかを明確に言語化し、原課訪問でも普段お会いできない職員の方々と話せることを楽しみに過ごすことを意識していました。
- 自分が心から思っていることを自分の言葉で、なおかつ楽しそうに話せるといいのかなと思います。
- 人事面談では、用意してきたものと自分の人間性を緊張しすぎずに伝えること。
- 官庁訪問をする目的を持つことと楽しく過ごすことを常に考えながらいると、人事面接でも原課訪問でも明るく振舞うことができ、最大限のパフォーマンスを出せると思います。
- 官庁訪問は原課でいただけるお話に対し、どれだけ関心を持って学びを得られたか発露する場だったのかなと思います。その点で日常の問題意識や人と話したことなどが自分の興味を広げてくれる強い武器になると実感しました。したがって当日は気合いすぎず省庁関わらず話を楽しんで聞いて、自分の経験を遊べて、という形がベストなのかなと感じています。

体調管理

かなり疲れると思うので体力が鍵になると思います。タフさなども見られているのかなと考えていたので、官庁訪問期間中は疲れを見せないよう、常に笑顔で元気な振り舞いを心がけました。（→p.5「休日の過ごし方」）

国土交通省の官庁訪問

教養区分試験対策

2026年度から春の総合職試験（大卒区分）にも教養区分が実施されることになりました。

教養区分に1桁順位で合格した内定者に、教養区分試験対策について執筆してもらいました！

ご自身の得意不得意などを考慮した勉強法を意識してみてください。一例として、私の対策法を紹介したいと思います。

全体のスケジュール感としては、一次試験までは基本一次試験の対策のみしました。二次試験対策は一次試験後からでも、十分間に合わせることができると思います。

一次試験(マーク試験)について

まず、一次試験の基礎能力試験について、重要となるのは**知能分野**の判断・数的処理、文章理解になるでしょう。この中で、私は特に文章理解を安定的に取れるようにしつつ、数的処理の演習を重ねました。数的処理については、基本的には解法のパターンを習得し、解法パターンを組み合わせながら解いていくことになります。最初から国総過去問などのレベルの高い問題に挑戦するのではなく、初めは市販の問題集などで他の公務員試験の過去問などを用いながら解法パターンに慣れていくことが重要です。可能であれば市販の問題集を複数周回してから過去問などに挑戦するのが良いと思います。

知識分野については、各分野の出題数が少なく学習のコストパフォーマンスが悪いため、あまり力を入れ過ぎず、共通テストや大学入試で学習した科目は少なくとも得点できるように復習する程度で良いでしょう（社会科学分野については後述）。過去問で出題の難易度を踏まえつつ、力点を置く分野とそうでない分野でメリハリをつけた学習をした方が良いでしょう。

総合論文試験について

次に、総合論文試験についてです。こちらは各試験の中で配点の比率が最も高く、かつ基準点も設けられており、教養区分試験の中でも要となります。一方、問われるテーマが幅広く、対策をしにくい範囲でもあります。その中で私が行なった対策としては、2つの対策があります。

まずは、**文章を書くこと自体の対策**です。内容を磨き上げることに目が行きがちですが、この論文試験は、分量を加味すると時間的にシビアな試験です。まずは過去問などを用いながら、制限時間の中で問いを読む時間、構成を考える時間、実際に書く時間をどれくらい配分するかを、予めシミュレートすると良いと思います。また、普段手書きでの長文筆記になれていない方は、練習の中で、字の丁寧さとスピードのバランスにも気をつけてみてください。そして、最も大事なものは文章が論理的か、設問に真正面から答えられているかという点です。実際に書いた論文を読み返し、論理が破綻している部分、わかりにくい部分がないか洗い出し、構成から文章を書き起こす際の留意点（例えば一文が長くなりやすい、主語と述語がわかりにくい、話題が脱線しやすいなど）を意識するだけでも大きく変わります。

次に、論文の出題テーマの対策です。問われうるテーマが幅広く、各テーマについて、満遍なく抑えることは不可能に近いです。一方で、どのようなテーマにおいても通底する知識や基本的な考え方も存在するのではないのでしょうか。国家として政策を立案するのであれば、憲法への理解とそれをもとにした考え方が必須ですし、政策がどのようにして立案されていくのか、政治と行政の関係などは行政学などからも学ぶことができます。特に、総合論文第一部は「政策の企画立案の基礎となる教養・哲学的な考え方に関するもの」を問うものであり、このような知識・理解が重要です。ただし、法学部以外の方などは一から憲法や行政学、政治学を学ぶことは難しいと思うので、前述の基礎能力試験知識分野で問われる社会科学の対策と合わせて、基礎的な知識や考え方を習得すると良いでしょう。また、国際情勢など時事的な話題が組み込まれることもあるので、こちら知識分野の時事対策と合わせて行うと良いと思います。

しかし、一番大事なのは相手に伝えようとすることです。教養区分試験が「企画力、建設的な思考力及び説明力」を問おうとする以上、相手に伝わらないことには、知識があっても得点に繋げることはできません。習得してきた知識や考え方を詰め込みたくなることもあるかもしれませんが、とにかく読み手が理解しやすく、思考を辿れるという大前提に立った上で、企画力も示すことができる論文を練習の中で目指してみてください。

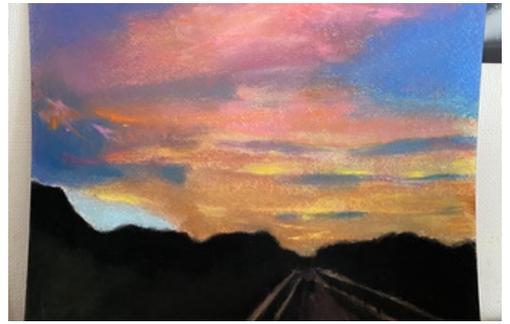
二次試験について

二次試験で課されるいずれの試験も場数を踏むことが重要です。既に合格した先輩や同じ試験を受ける学生、省庁の採用イベントで出来た知人などに試験官役になってもらい、実践練習を積むと良いでしょう。また、各省庁がワークショップと試験対策を組み合わせたイベントを開催しているので、そちらもぜひ参加してみてください。

企画提案試験について特筆します。この試験は事前に参考資料が提示され、あらかじめ政策案を練っておくなどの対策が行う方が多いです。そして試験当日は、政策立案のプロである行政官の方との質疑応答を乗り越える必要があります。また、事前資料が提示されるもののテーマが広過ぎる場合もあります。私が政策案を考えた際は、実際のデータを大まかに把握し、政策の実行段階のことも踏まえ、実現可能性やその影響などに十分注意して考えました。また、既合格者などに見てもらい、質疑応答をする中で、自分では気づけなかった点や、考えていても実際はうまく説明できない点を洗い出すことができます。

当日は待ち時間も長く、精神的にも疲れるところがあるかと思いますが、自信を持って堂々と振る舞うことが何より大切です。応援しています！





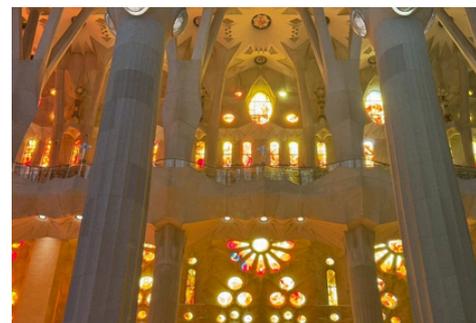
内定者37名の「あなたを



あなたを最も表す一枚！



最も表している一枚」



あなたを最も表す一枚！

職員の方に日々働く職場内部を撮影していただきました！

国交省 写真館



内定者の好きな交通機関



2 内定者って どんな人？



1. 内定者基礎データ

出身大学・専門領域編 . . . pp.18~19	※内定者の出身大学は、過去2年分も掲載
試験編 pp.20~21	※内定者の試験区分は、過去2年分も掲載
官庁訪問編 p.22	※内定者の訪問日は、過去2年分も掲載
官庁訪問準備編 p.23	※内定者のイベント参加回数は、過去2年分も掲載
民間就活編 p.24	

2. 内定者の就活体験記 pp.25~50

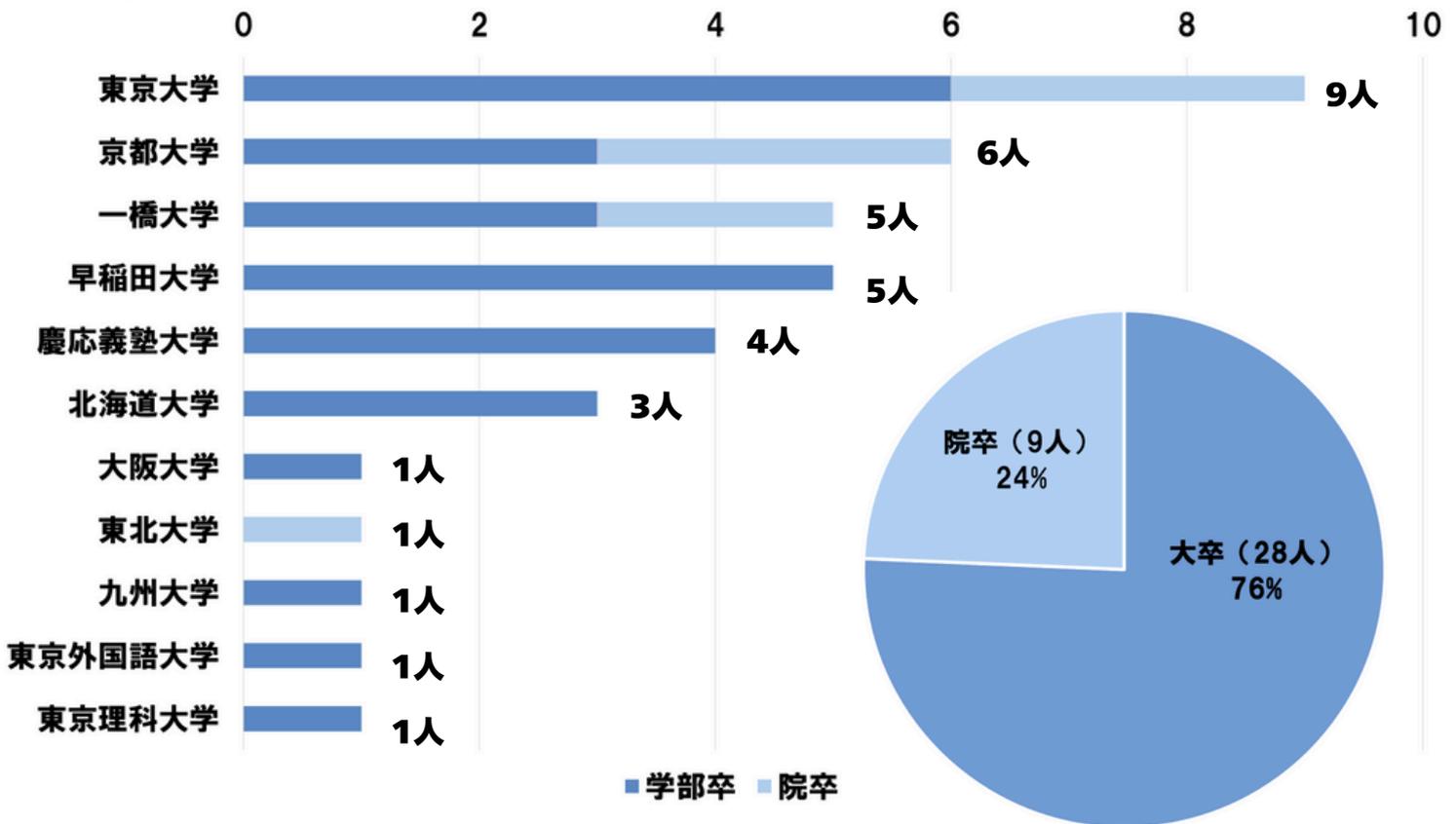
索引はp.25

内定者ってどんな人？

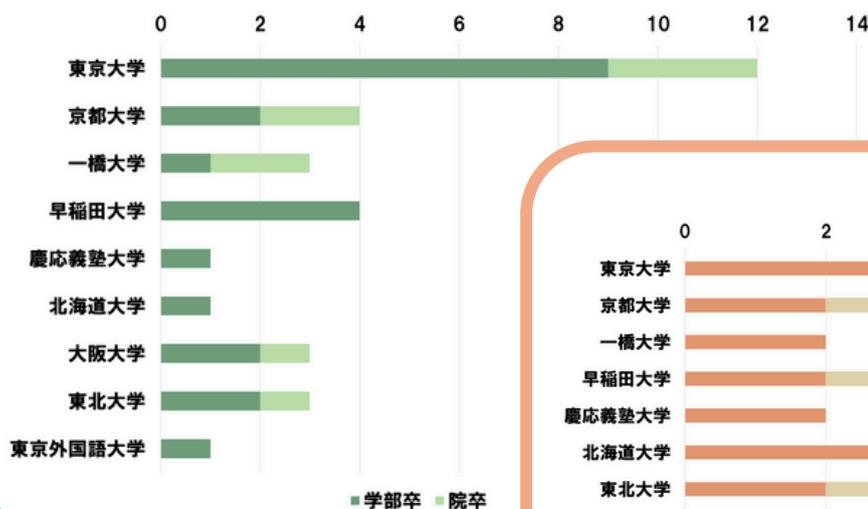


出身大学・専攻領域編

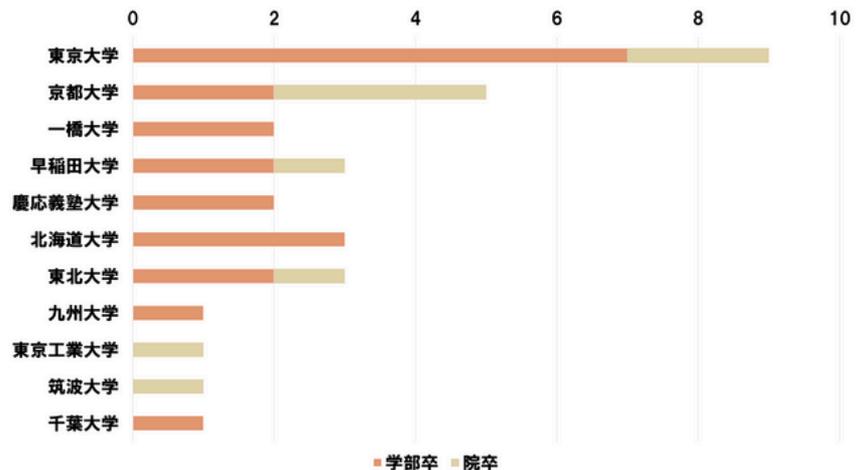
出身大学



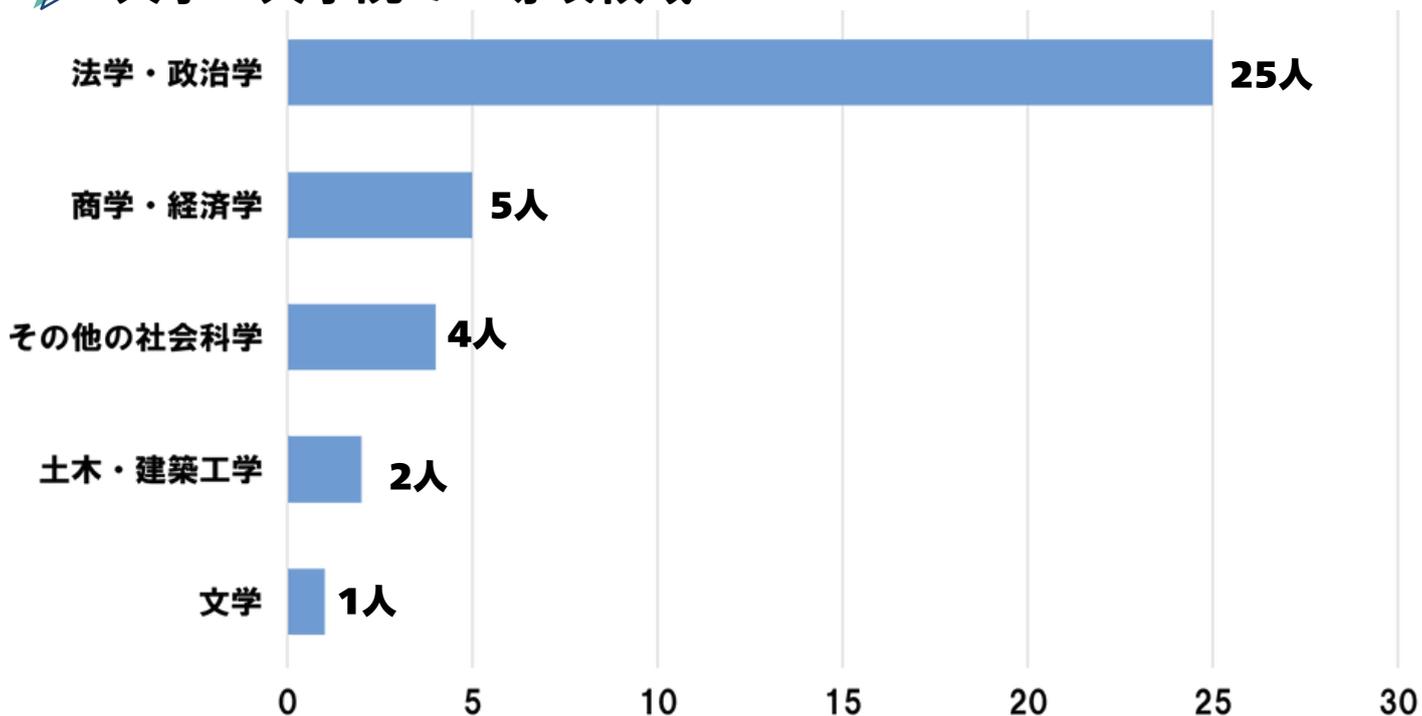
令和7年度



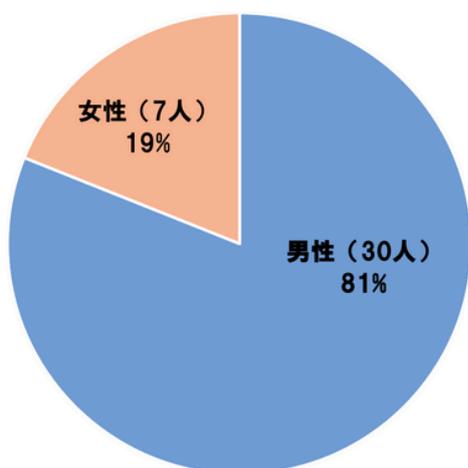
令和6年度



▶ 大学・大学院での専攻領域

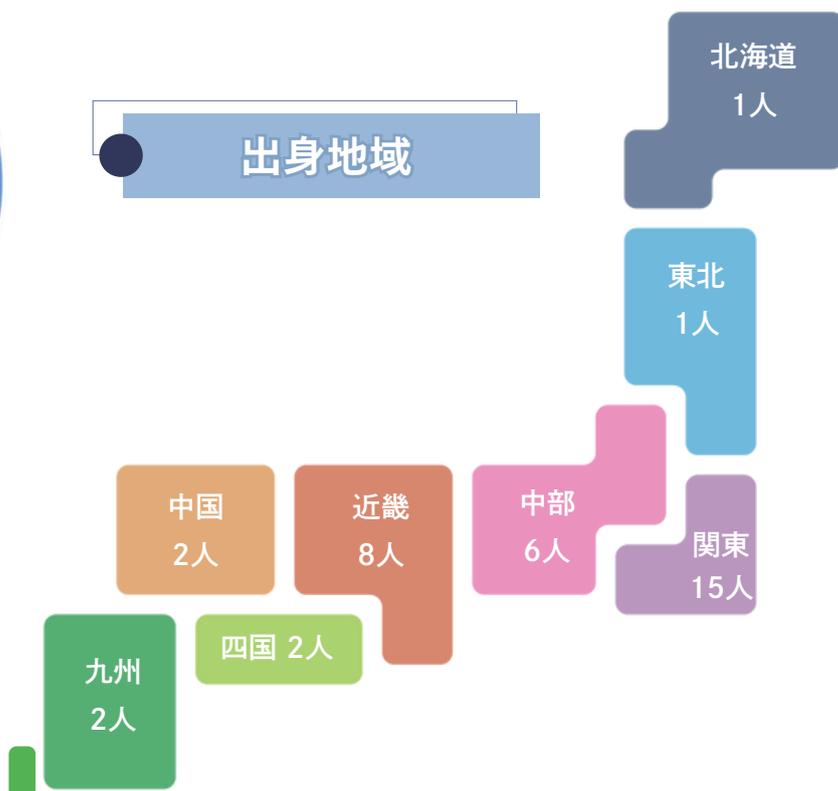


性別



令和5年度35名入省（女性14名）
令和6年度30名入省（女性10名）

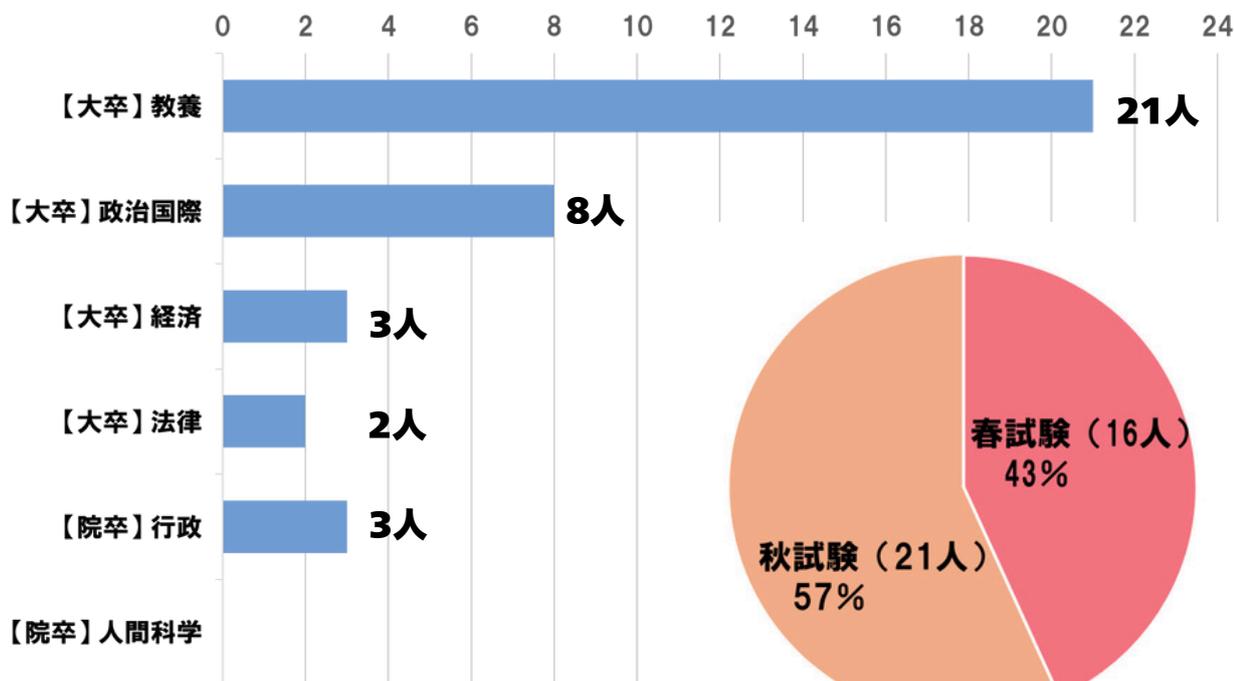
出身地域



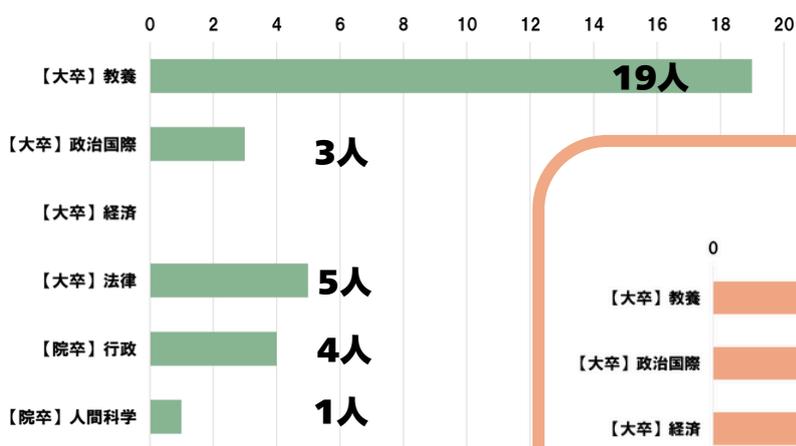
内定者ってどんな人？

試験編

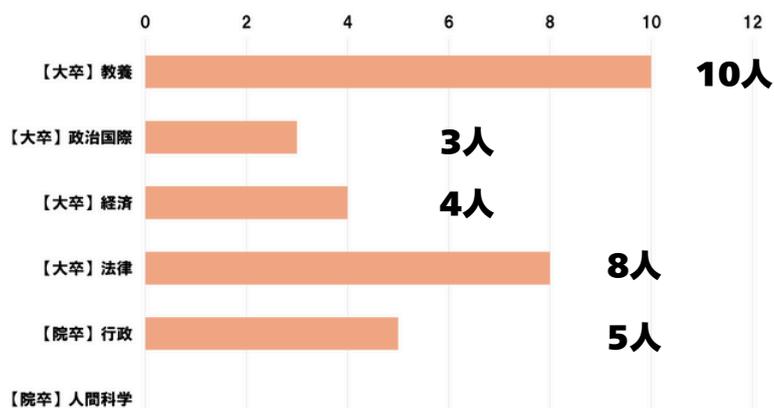
試験区分



令和7年度

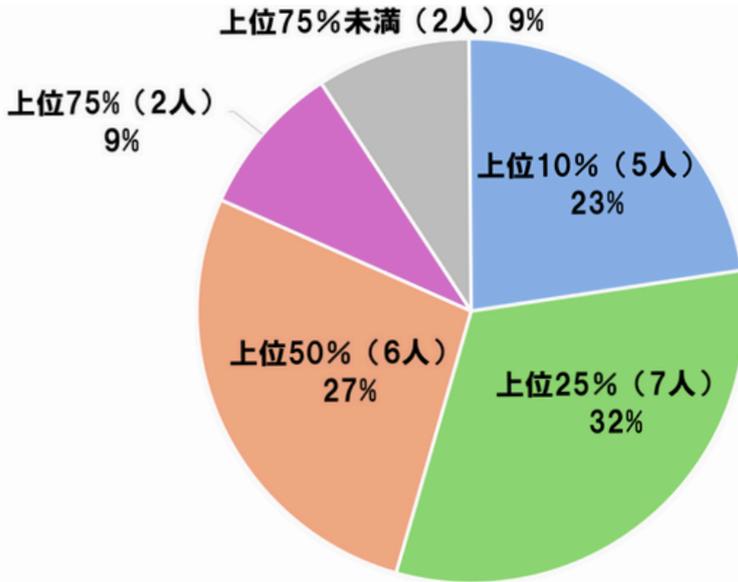


令和6年度

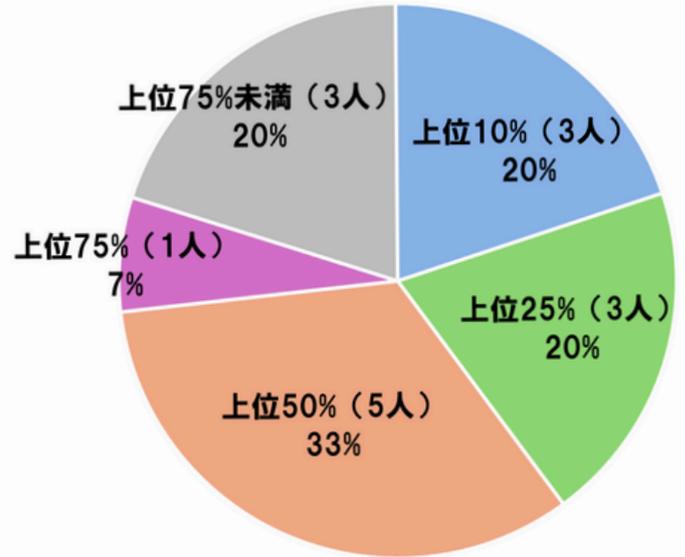


試験の席次

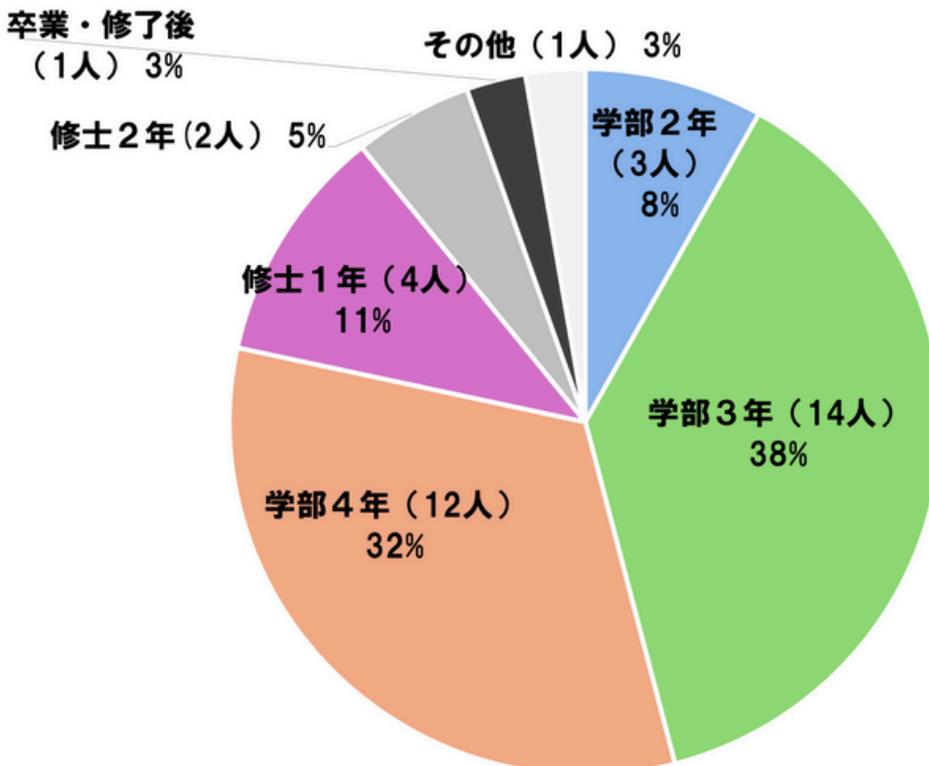
秋試験合格者



春試験合格者



試験に合格した時期 (p. 7 より再掲)



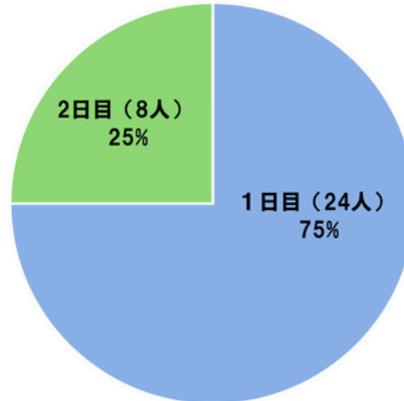
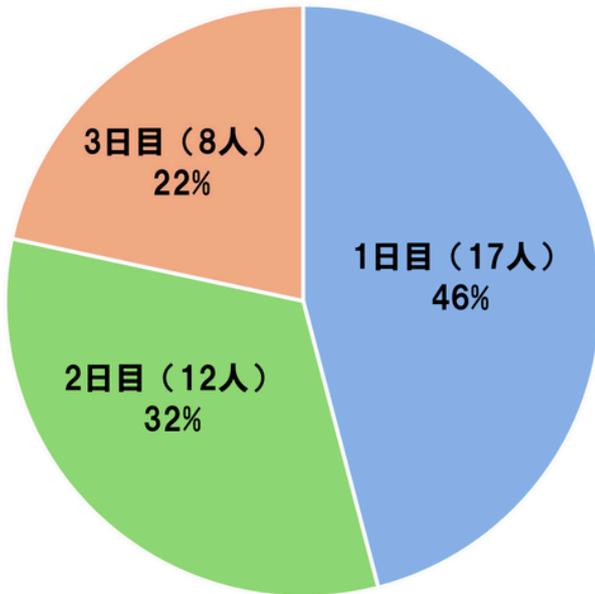
内定者ってどんな人？



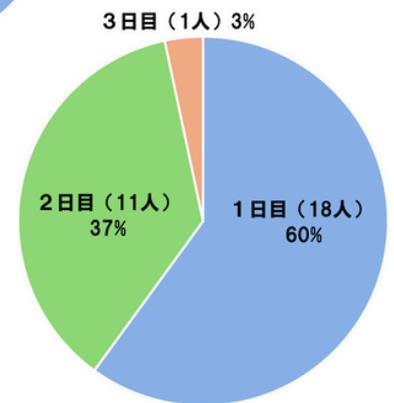
官庁訪問編

訪問日

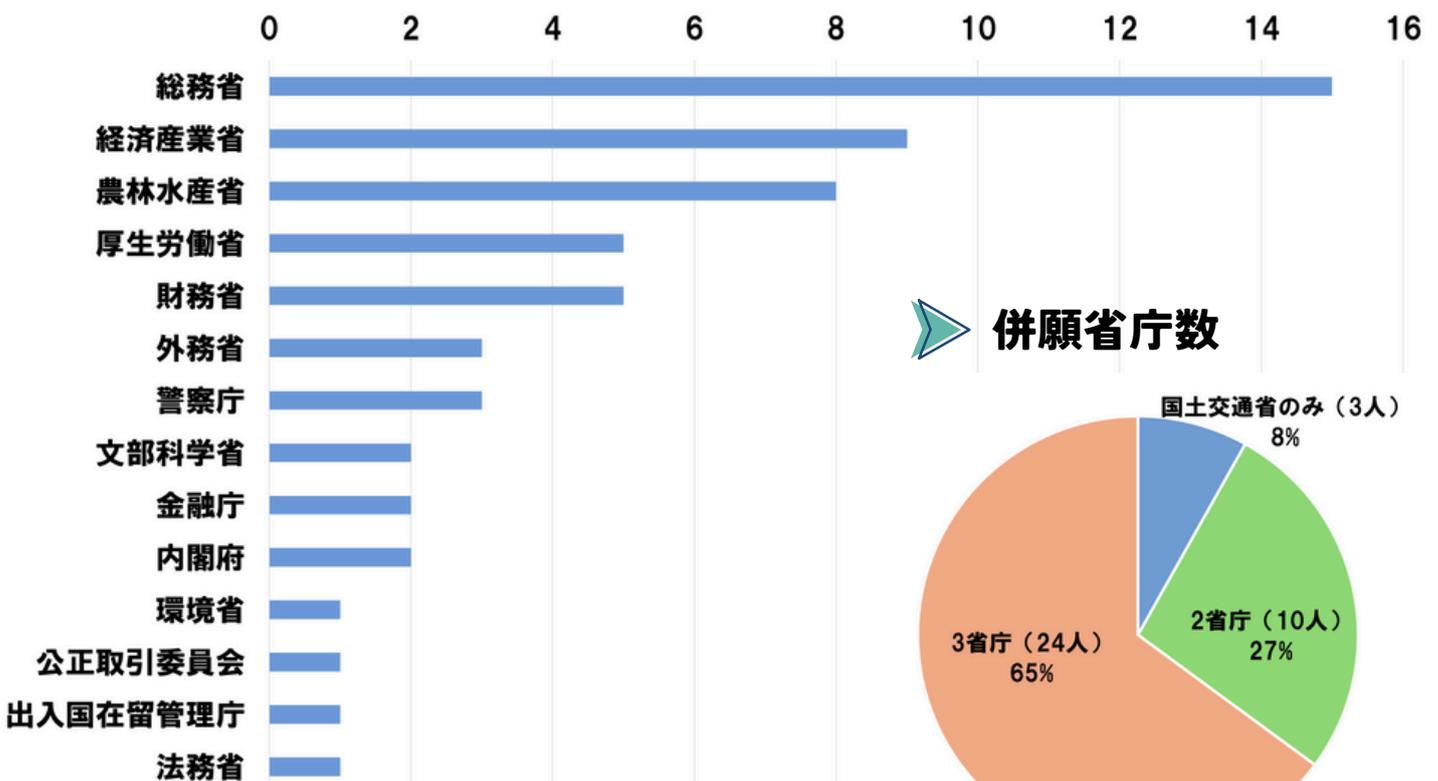
令和7年度



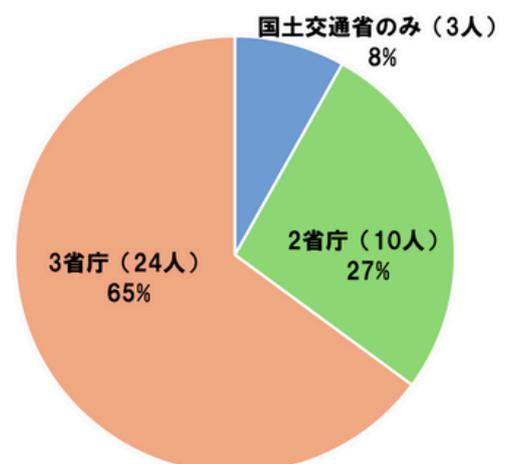
令和6年度



併願していた省庁(複数回答)

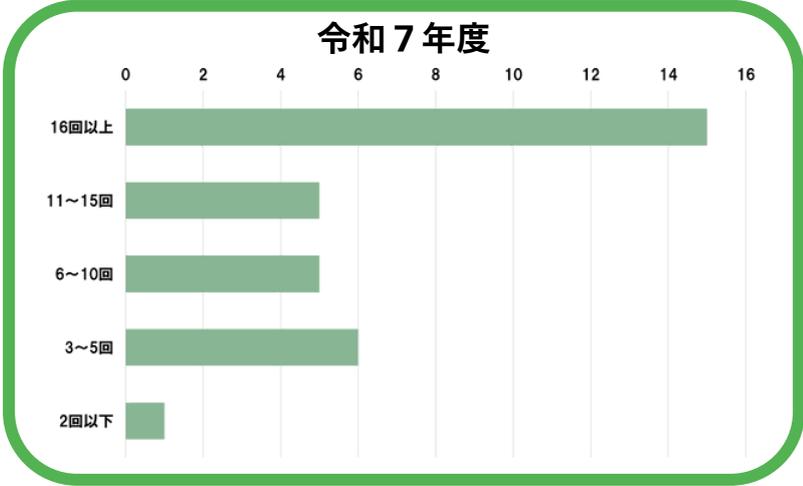
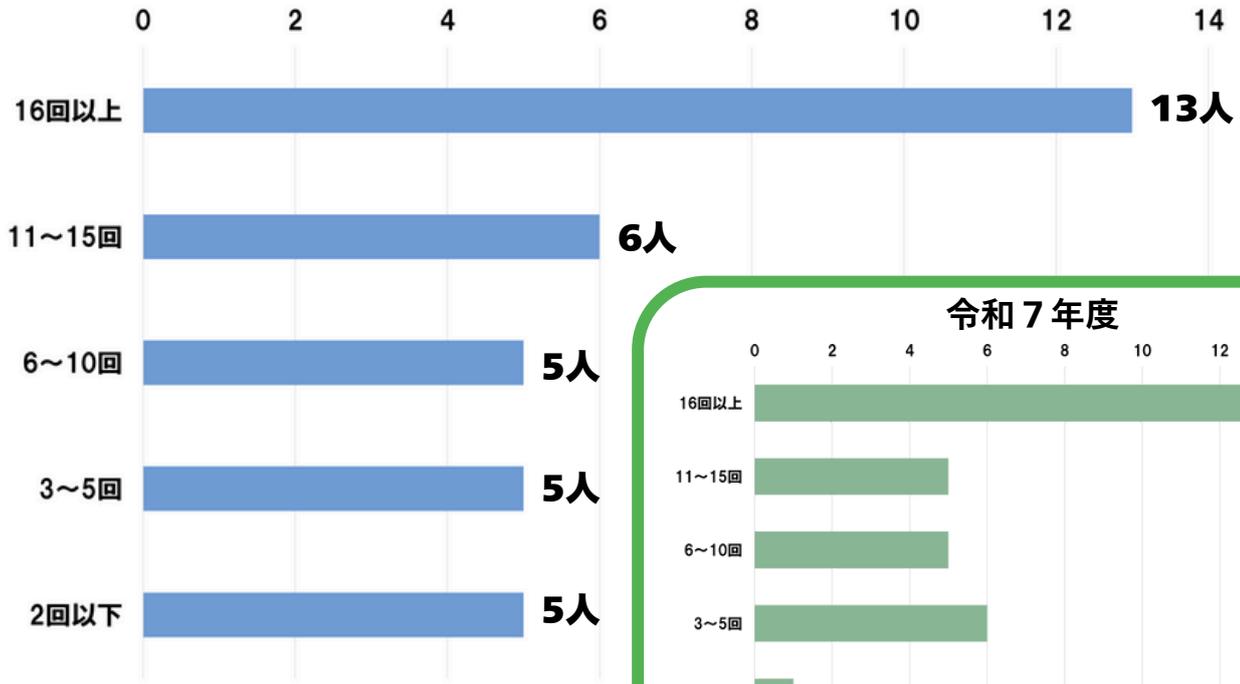


併願省庁数

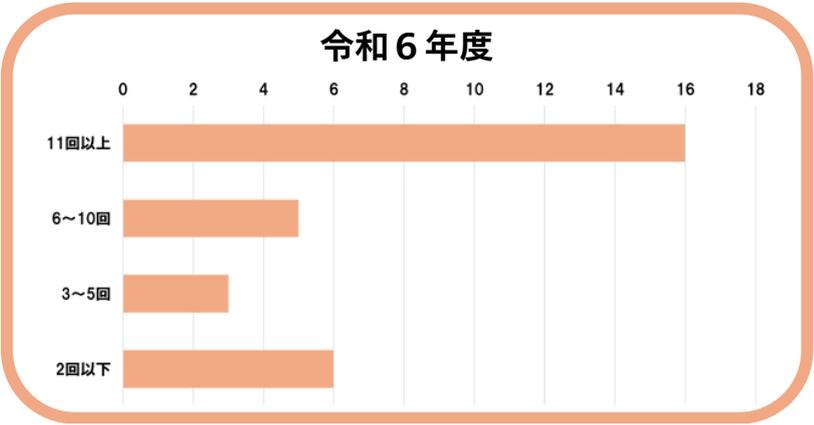
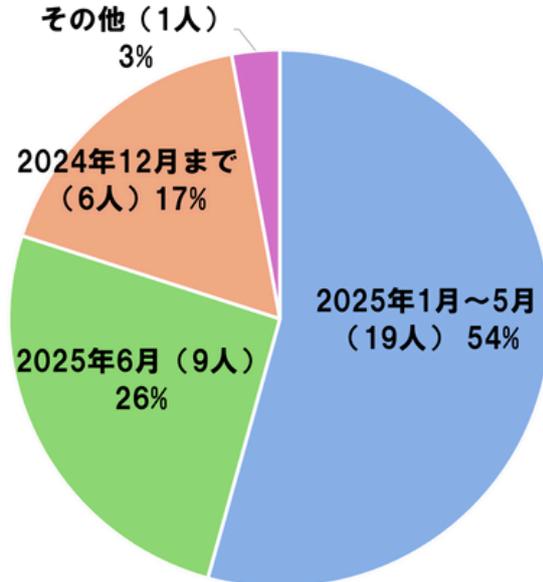


官庁訪問準備編

採用イベントに参加した回数



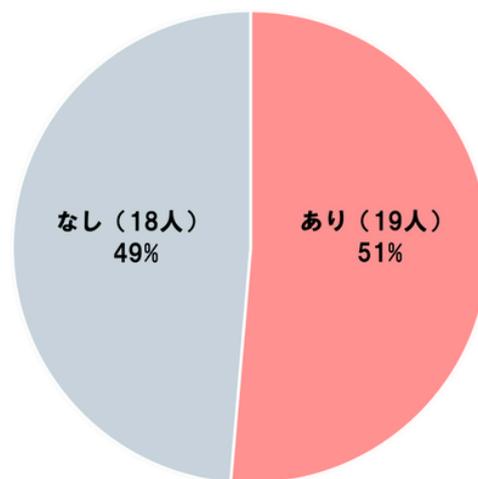
国土交通省を訪問することを決めた時期



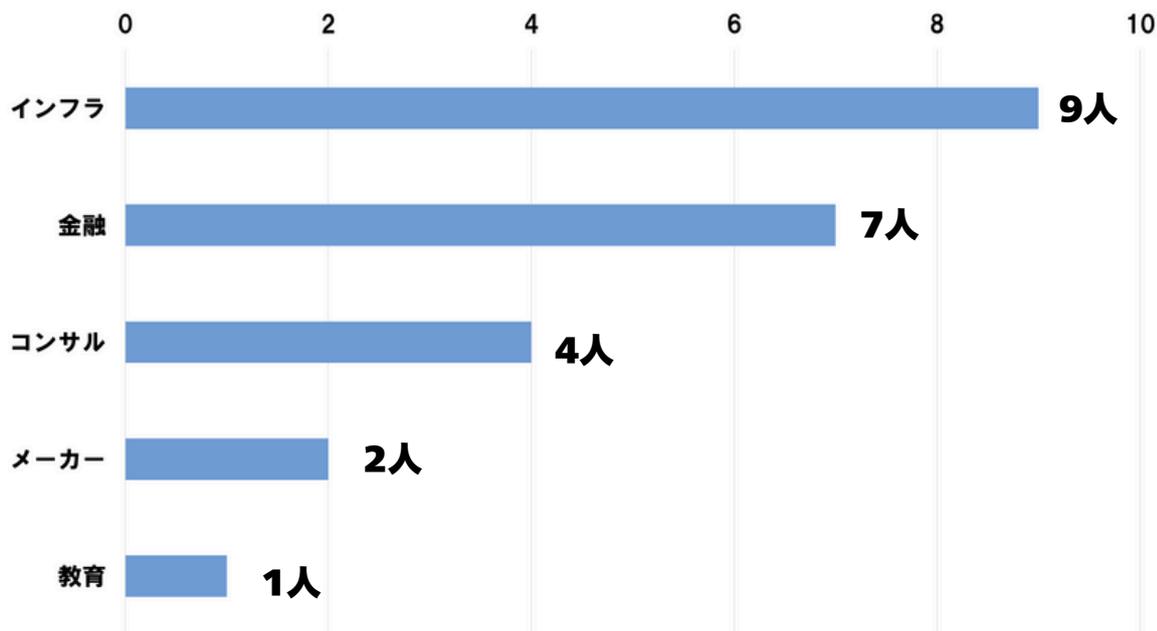
内定者ってどんな人？

民間就活編

民間企業から内定があった？

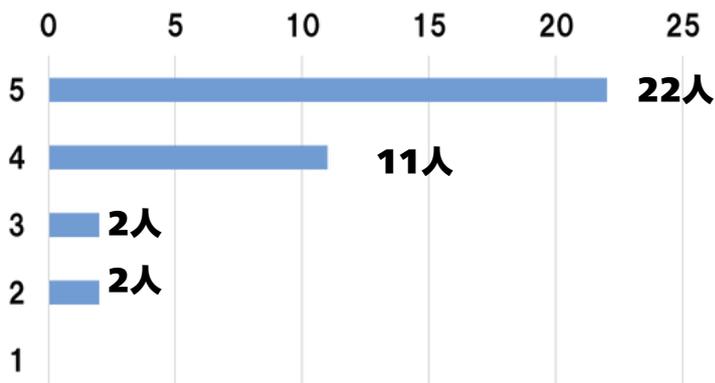


民間企業内定先の業界



民間企業と公務員間の志望度合い

(5に近いほど公務員志望が高い)



官庁訪問までの過程について、内定者22名がさまざまなテーマから体験記を執筆しました。民間企業の就職活動も重点的に行った内定者、公務員専願だった内定者、留年・留学・社会人を経験した内定者など、22名22通りの就活体験記を掲載しています。索引から皆さんと似た境遇にいた内定者を、あるいは皆さんの興味のあるテーマ例から内定者を見つけてみてください。

キーワードから探す

※本文中では行政機関の名称を略称させていただいている場合があります。

教養区分・・・p.26,29,30,32,33,35,37,38,39,43,44,45,50
 春試験・・・・・・・・・・p.27,31,34,36,41,42,46,47,48
 院卒・・・・・・・・・・p.26,32,36,39
 留学・・・・・・・・・・p.29,30,32,41
 留年・・・・・・・・・・p.37,42,50
 休学、起業(p.48のみ)・・・・・・p.30,48
 理系から総合職事務系・・・・・・p.26,50
 民間企業に就職経験・・・・・・・・・・p.45
 国家公務員専願・・・・・・・・・・p.34,38,43,45,48
 地方公務員・・・・・・・・・・p.29,31,32
 民間企業も就活 p.26,27,32,33,35,36,37,39,41,42,44,46,47,50
 地方からの就活・・・・・・・・・・p.30,31,32,37,44,46
 1日目・・・・・・・・・・p.26,27,33,35,36,37,46,47,48,50
 2日目・・・・・・・・・・p.29,30,32,38,41,44
 3日目・・・・・・・・・・p.31,34,39,42,43,45
 2度目の官庁訪問・・・・・・・・・・p.50



総務省 (自治)・・・p.26,29,34,39,42,43,50
 総務省 (ICT)・・・・・・・・・・p.33,36,44
 農林水産省・・・・・・・・・・p.27,32,35,41,42,43
 経済産業省・・・・・・・・・・p.29,31,32,38,39
 外務省・・・・・・・・・・p.30,39
 国土交通省専願・・・・・・・・・・p.37,48
 防衛省・・・・・・・・・・p.30
 文部科学省・・・・・・・・・・p.31
 厚生労働省・・・・・・・・・・p.34,45,47
 金融庁・・・・・・・・・・p.33
 警察庁・・・・・・・・・・p.45
 財務省・・・・・・・・・・p.50
 環境省・・・・・・・・・・p.46
 公正取引委員会・・・・・・・・・・p.46



テーマ例から探す

民間企業と併願したのか、公務員専願だったのか・・・・・・・・・・p.26,27,29,31,32,34,35,39,41,42,46,47,50
 就活軸の検討・・・・・・・・・・p.26,27,40,41,47
 志望動機の検討・・・・・・・・・・p.26,33,35,37,39,41,43,45,46
 志望省庁・企業を決めたきっかけ・・・・・・・・・・p.26,30,31,32,34,36,38,40,42,43,44,45,47
 官庁訪問に向けた準備 (面接)・・・・・・・・・・p.28,29,36,37
 官庁訪問に向けた準備 (説明会)・・・・・・・・・・p.30,34,38,43,44,46
 官庁訪問に向けた準備 (ES)・・・・・・・・・・p.33
 留年を経て感じたこと・・・・・・・・・・p.38,(42),50

Cannot-stopさん

民間企業と併願したのか、公務員専願だったのか

独立行政法人や民間企業も含めて検討しました。これまでの体験や大学・大学院における専攻分野から、キャリアを通じて、国土空間への働きかけを通じて国民と国家に貢献していきたいと望んでおり、公務員から民間まで、幅広い働きかけの主体が存在していることを認識していたため、最初から完全に絞り込んでいたわけではありませんでした。

他省庁や独立行政法人、民間企業も含めて検討し、実際に説明会やインターン、選考過程に参加することで、それぞれの主体がどのような立場・視点で、どのようなアプローチで国土空間に働きかけているかについて、少しでもイメージを持つことができたように思っています。このように複数の異なる主体の立場・視点に立って物事を考えた経験は、国土交通省で、行政官としてキャリアを積み上げていく上でも役に立つように感じます。

就活軸の検討

我が国に生まれ、幸いにして十分な教育を受ける機会を得ることができた以上、キャリアを通じて国民と国家に幅広く貢献することが自分自身に与えられた果たすべき責務の一つであると、学生時代を通じて心のどこかで意識し続けていました。

また、合宿やまち歩き活動、立体日本地図制作を通じて地理に親しむサークル活動に積極的に参加していたこと、そして学部から大学院修士課程にかけて都市計画・デザインを専攻してきたことから、国土空間に何らかの形で働きかけ、その魅力や可能性を引き出して高めながら、もたらされるリスクや制約を低減していく、そのようなキャリアを歩んでいきたいと考えようになりました。

自身が併願していた、国と地方自治体、地方自治体同士の関係のデザイン、多様な政策分野間の調整を執り行う総務省、住宅供給や都市の再開発、災害復興を中心に、中立、そして公益の観点から具体的な空間のコーディネート・デザインに携わることができる独立行政法人、我が国の経済・人口の大部分を占めている地域の移動を、複数の世代の鉄道を中心に支えることを使命とする鉄道会社においても、以上で示した二つの軸を基軸としたキャリアを何らかの形で描くことができるのではないかと認識していました。

志望動機の検討

特に大学、大学院において都市計画・デザインを専攻しており、既存の法制度が実際の国土空間をどのように形成しているのか、実際の国土空間にどのような影響を与えているのか、国土空間をデザインする法制度はどのようなものであるべきか、といった内容について、講義や演習、研究を通じて考えを巡らせる機会が多かったことが、国土交通省を志望する上での大きな要因となりました。理系として、そして専攻との関係から、土木や住宅・都市の分野で総合職技術系として入省することも考えましたが、総合職事務系として国土交通省で勤務する周囲の学科同期やサークル同期の話も聞いた上で、物流・人の移動、観光に関する分野にも関心があり、国土空間に関する多岐にわたる分野の視点を獲得し、その上で国土空間をデザインしていく、そのような姿勢でキャリアを歩んでいきたいという意志が強くなり、総合職事務系として国土交通省を目指すことを決心しました。

国土空間に働きかけることができる主体として、他省庁や独立行政法人、民間企業も選択肢に入れていましたが、所管する広範な法制度や補助金、税制・金融措置、そして事業の実施等を通じて、直接的、間接的に幅広いアプローチで国土空間全体に働きかけることができるのは、国土交通省の唯一無二の魅力であると認識するようになり、最も志望度が高い状態がずっと継続していました。

志望省庁・企業を決めたきっかけ

我が国で生を受け高等教育を修めた者として公共・公益の視点から国民と国家に幅広く貢献していきたいという意志、人間活動の舞台である物理的空間、自身が生まれ育った国土空間に何らかの形で働きかけたいという意志、これら二つの意志を軸として、就活の対象の企業・省庁を絞り込みました。その結果、就活の対象が国土交通省、総務省、そして独立行政法人1法人、民間鉄道企業1社に絞り込まれました。その中でも、所管する広範な法制度や補助金、税制・金融措置、そして事業の実施等を通じて、直接的、間接的に幅広いアプローチで国土空間全体に働きかけることができる国土交通省は、最後まで最も魅力的な選択肢として残り続けました。国土交通省への就職自体は、学部3年ごろから意識し始めていましたが、その時点では総合職技術系として就職することを想定していました。学部4年の春に総合職技術系の試験を受験して最終合格をいただきましたが、修士1年の春頃に、総合職事務系として中央省庁で勤務する学科やサークルの同期からの影響もあり、総合職事務系としてキャリアを歩む選択肢に目が向くようになりました。(続く)

最後に

自分自身、学部生の頃、総合職技術系や民間を選択肢として考えていたり、修士課程に入ってから総合職事務系で他の省や民間も選択肢として考えていたりして、国土交通省の総合職事務系が唯一絶対の選択とは思っていませんでした。修士1年のタイミングで教養区分に合格したあたりで、なんとなく国土交通省の総合職事務系が第一志望かな、というイメージが湧いてきたくらいです。このように時間をかけてゆっくり悩むことは、必ずしも楽なものではなく、自分が本当は何をしたいのか、自分の中ではっきりと自覚できるまでに相当な時間がかかると思います。そして、最後の決心がつくのが官庁訪問中であるということも珍しくないでしょう。自分自身、最後の決定打は、官庁訪問中に面接を通じて多くの職員の方とお話したり、待機時間中に志望学生と話したりする中で抱いた、直感に近い感覚でした。

特に中央省庁での採用を志望する方々は、周囲と比べても最後まで上記のような悩む期間、言い換えれば宙ぶらりんな期間を過ごすことになるでしょう。その期間の悩みや不安が大きなものとなることもあると思います。ただ、就活を終えた後の納得感や達成感も、その悩みや不安に比例して大きなものになると考えています。これは自分自身やその周囲で同様に中央省庁を目指していた先輩や友人の様子を見る限りでは、本当のようです。

どうか最後まで考え、悩み続ける自分に誇りを持って、自信を持って官庁訪問に挑んでいただければと思います。その過程でもしも国土交通省にご縁がありましたら、よろしくお祈りします。

Y.A.さん**民間企業と併願したのか、公務員専願だったのか**

私は当初、総合商社や金融、コンサルティングファームなど民間企業も並行して受けていました。理由は二つあります。

一つは、自分のキャリア観を広げるためです。商社の「グローバルに挑戦できる環境」や、コンサルの「自己を成長させ、市場価値を高める場」も魅力的に映り公務員志望と並行することで、改めて「自分は何を大事にしたいのか」を整理できました。

もう一つはリスクヘッジです。国家総合職は狭き門なので、民間就活にも真剣に取り組んでいました。当初は民間の可能性も視野に入れていましたが、幅広い業界や官庁を見ていく中で、自分は「国全体を支える仕事」に携わりたいという思いを強くし、最終的に国交省を志望する決心ができました。

結果的には国交省を選びましたが、他省庁や民間を検討した経験は大きな財産になりました。他省庁を回る中で「省ごとに雰囲気や強みが大きく違う」ことを実感できましたし、民間面接では「ビジネス視点で社会課題を見る」訓練になりました。何より、多くの面接を経験できたことが官庁訪問での自信にもつながりました。

両立は決して完璧ではありませんでしたでしたが、その時々でやるべきことに集中し続けました。もし就活期に戻れるなら、民間もある程度は受けると思います。ただし「手広く」ではなく、自分の軸に近い数社に絞れば、もっと効率的に比較できたはずですよ。

就活軸の検討

私の就活軸は「チームワーク」と「リーダーシップ」でした。

大学のゼミでは代表として新入生募集や企画運営を進める中で、メンバー一人ひとりの強みを引き出し、協調させることの大切さを実感しました。また、部活動で部長を務めた経験からも、「チームをまとめて前進させる存在でありたい」という思いが強くなりました。

民間就活では、この軸を「グローバルな舞台で挑戦するチームの一員として活躍できるか」という視点に重ね、総合商社やグローバルに活躍できる企業を中心に見ていました。

一方で公務員就活では、「国全体を支えるチームの一員として、時にリーダーシップを発揮しながら政策を前に進められるか」という観点で志望を固めました。(続く)

国土交通省は、グローバルに活躍する機会も豊富で、約6万人の職員全員が一つの強固なチームとなって働く省庁です。就活の軸という面でも、自分に最も合致した場所だと感じています。結果として、「チームワーク」と「リーダーシップ」は民間・公務員双方に共通する普遍的な価値観となり、就活全体を貫く軸になりました。

官庁訪問に向けた準備(面接)

官庁訪問に向けて取り組んで良かった点は、まず「チームワーク」と「リーダーシップ」を自分の経験に即して整理したことです（これは民間就活の準備の中でも取り組んでいたもので、官庁訪問に限ったものではありませんが）。ゼミ代表や部活動のエピソードを、「どう周囲を巻き込み成果を出したか」「リーダーとして困難な局面でどう決断したか」といった観点で語れるようにしました。公務員の仕事は常にチームで進めていくものなので、この視点を持って準備できたのは有意義でした。

一方で反省点は、志望動機をもっと早く固めるべきだったことです。官庁訪問では、民間のように過去の経験を問われるよりも、志望動機を聞かれる場面の方が圧倒的に多く、感覚としては8割近くが志望動機でした。私は原課訪問を経て肉付けを進めることができたため、最終的には内々定を頂くことができましたが、もしもう一度挑むとすれば、「なぜ国家公務員を志望するのか」「なぜその中でも国交省なのか」「どのようなことを実現したいのか」をより明確にするとと思います。

印象に残っているアドバイスは、「リーダーシップを取る場面だけでなく、フォロワーとして支える経験も語れると良い」という言葉です。国交省の仕事は幅広く、時に先頭に立ち、時に支える柔軟さが求められます。その言葉を受け、私自身も「リーダーとして動いた経験」と「支え役に回った経験」の両方を整理し直し、面接に臨みました。その結果、面接官に対して、より具体的に活躍するイメージを伝えられたのではないかと思います。

大学2年 3月

初めて国家公務員の説明会（外務省）に参加

大学3年 4～5月

地域活性化を軸に総務省のイベントに参加

夏

経済産業省と民間企業のインターンシップに参加。公務員試験対策も並行。国土交通省の説明会に初参加。

9月

国土交通省の1dayサマージョブに参加。教養区分に挑むも一次試験で不合格となり、一度は国家公務員を諦めかける。

10～12月

それでも諦めきれず、春試験の対策を再開。国土交通省・農林水産省・経済産業省の説明会に参加。民間企業のOBOG訪問にも積極的に取り組む。

11～2月

民間就活に専念。面接や自己分析に注力。

3月

最も気合いを入れた時期。効率的な試験対策を実践し、公務員試験に挑戦。国土交通省の宿泊型ワークショップに参加し、入省したい気持ちがさらに強まる。一方で、民間企業のESも30社以上提出。

大学4年 4月

一次試験の合格通知を受け取り、二次試験対策に取り組む。同時期に民間就活も本格化していたため、無理をせず体調管理を重視。国土交通省のDay-Outに参加。

5月

民間就活が最終局面に。各省庁のイベントにも参加しつつ、官庁訪問で回る省庁を見極める。公務員試験の合格発表があり、官庁訪問への切符を得る。

6月

回る省庁を最終決定し、ESを作成。これまで参加したイベントで得た学びや印象を整理し、官庁訪問本番に挑む。

ITさん

民間企業と併願したのか、公務員専願だったのか

私は**公務員専願**で就職活動をしていました。具体的には、**国家総合職と東京都（1類B一般方式）、大阪府を受験**しました。国家総合職は大学3年生の秋試験（教養区分）で合格をいただき、東京都と大阪府は最終選考が官庁訪問後であったので、最終選考を辞退させていただきました。東京都と大阪府を受験した理由としては、国家公務員試験とも併願しやすい受験科目であったことや公共のために働く公務員という共通点があったと思います。また、比較的大きな自治体で働くことで日本全体へ与える影響も大きく、仕事のスケールも大きいのではないかとこの考えもありました。実際に、東京都や大阪府の就活イベントに参加してみると、職務のスケールが想像以上に大きくて驚くと同時に、そのような職務に携われることに魅力を感じました。一方で、国家公務員と地方公務員の違いも理解することが出来ました。具体的には、市民との距離感の違いや海外とのつながりなどが挙げられます。個人的に一番大きな違いだと感じたのは、**国家公務員には「法律改正などのルール作りを通して、国家の方向性を定めていく」という国家公務員にしかできない役割がある**という事です。これらの違いを自分の中で比較検討していく中で、自分が本当にやりたいことは国家公務員として日本の未来を創っていくことだと考えるようになりました。国家公務員と地方公務員の違いを整理することが出来たという意味では、**地方公務員を併願したことは自分の成長につながった**と感じました。同じように民間企業を併願していれば、自分の視野がさらに広がっていたのではないかと考えると、民間企業を併願していなかったことを少し後悔します。しかし、就活当時の私にとっては公務員就活で手一杯だったので仕方ないことかなとも思っています。皆さんには、無理のない範囲で様々な職種に対する関心を持っていただければいいのかなと思います。

官庁訪問に向けた準備(面接)

官庁訪問の準備の仕方は、一般的な面接と対策方法が全く異なると思います。決まった質問があるわけでも、ガクチカや志望理由を聞かれて終わるわけでもありません。**官庁訪問で一番重要なことは「自分の成長の伸びしろを見せる」こと**だと思います。小手先だけの対策や知識の詰め込みでは太刀打ちできないと考えました。私は対策として、自分の志望動機を論理的に構築し、新しい情報を手に入れた時に、その情報を志望動機にどのように組み込むかという事を意識しました。**私は説明会などで新たに学習した内容が志望動機とどのように結びつくのか、**（続く）

自分の考え方がどのように変化したのか整理する事を心掛けました。ESにそれらすべてを記載することは難しいので、質問された時にしっかりと話せるように頭の中で考えをまとめていました。そのような練習をする場として最適だったのが各省庁の説明会です。説明会は新たな知識をインプットする場というよりは、新たな情報に対して自分がどのように感じたか、どのように向き合うかを考える場として活用していました。そして、その答え合わせのために質問をしたり、深掘りしたりしていました。この一連の作業に慣れることが官庁訪問の対策に繋がっていたのではないかなと思います。いくつかの省庁の個別相談会にも参加しましたが、どの省庁でも「職務に対する知識量」はそこまで重要ではないという旨の助言をいただきました。官庁訪問を終えて振り返ってみると、これは事実であると思います。自分が知らない情報や新たな考えを聞いた時に、それに対してどのように反応できるかが見られていると感じました。私は、官庁訪問前は自分の知識が不足しているのではないかと不安に思っていました。その必要はありませんでした。皆さんも説明会などに参加するたびに新たな情報を聞き、自分が勉強不足ではないかと不安になることもあると思いますが、**重要なのは知識をインプットすることではなく、それに対する自分の意見を述べられること**です。そのような心持ちで説明会などに臨まれるとよいのではないかなと思います。

官庁訪問前の短期留学

私は、在学中に留学するラストチャンスだと感じ、官庁訪問の4か月前でしたが、2月にアメリカに短期留学をしました。この留学はその後の官庁訪問に大きく影響しました。留学以前、私は地方での公共交通の維持といった観点から国土交通省に関心がありました。国内の現状しか知りませんでした。短期留学で海外における公共交通の現状を見たことで、**日本の独自性や問題点を深く理解することが出来た**と思います。例えば、地下鉄の料金システムやライドシェアなど日本とは全く異なる論理・考え方で成立しているものが数多くありました。それらを実際に体感することで、日本での課題を他国と比較して説明することが出来るようになりました。もちろん、1ヶ月という短い期間だったのでたくさんのお話を吸取できたわけではありませんが、自分の話すことにリアリティを付け足すことが出来るようになったと思います。さらに、日本と海外のつながりという新しい視点を獲得することもできました。数多くの日本企業製の地下鉄の車両や自動車を見て、日本の世界での戦いぶりを実感しました。また、観光分野における日本人気を肌で感じる機会も多かったです。官庁訪問では海外勤務経験が豊富な方を訪問する機会があったのですが、具体的なイメージを持ってお話を聞くことが出来ました。短期間の旅行でも良いので、**海外を知ることが重要**だと感じました。

H.Hさん

志望省庁・企業を決めたきっかけ

運送業に従事する父親の影響と、運送業界が直面する課題である2024年問題について議論したことがきっかけで国交省の所掌政策に関心を持つようになりました。ただ、その時点では外務省や防衛省、新聞記者やアカデミアなど、大学で学んだ東アジア政治の知識を活かすことができる進路を考えていたため、国交省に関心を抱きつつも、官庁訪問先には考えていませんでした。しかし、説明会等に参加する中で徐々に防衛省を訪問することに対し迷いを感じるようになりました。今年のはじめ頃には防衛省を訪問しない意思を固め、2日目に訪問する省庁を探し始めました。

志望する省庁を検討するにあたり、国際政治や安全保障に携わりたいという就活の軸を見直し、他に自分がやりたいこと、解決したい課題は何なのか考えました。その中で、その当時観光業界でアルバイトをしておりオーバーツーリズムの問題を身近に感じていたこと、父親の影響で物流問題の解決に関心があったことから、そのどちらにも携わることができる国交省を志望し始めました。また、国交省は、①国内外問わず東京以外の都市でも働きたい、②大学時代に習得した韓国語、現在学習している中国語を活かしたい、③幅広い業務に携わりたいという本音の就活軸にも合致していたため、官庁訪問に参加することを決めました。

官庁訪問に向けた準備(説明会)

上述の通り国交省は志望し始めた時期が遅かったため、対面イベントに一度も参加できませんでした。ですが、他の省庁の対面イベントには何度も参加しました。

対面イベントに参加する中で、人事の方との面識ができました。地方の大学に通っていたため、東京のイベントに参加するには相当な費用がかかる分、志望度の高さを伝えることもできました。訪問しなかった省ですが、北海道から対面イベントに頻繁に参加している志望者として採用担当の方に覚えてもらい、ぜひ官庁訪問に来て欲しいと声をかけていただいたこともありました。

また、対面イベントに参加すると志望者同士のネットワークを作ることできます。一緒に対策会をしたり、官庁訪問の情報交換をしたりすることができる仲間がいるだけで不安が多少解消されます。(続く)

第一クール1日目、対策会を一緒に行った友達の顔を見てとても安心したのを覚えています。国交省には志望者仲間が一人もいなかったため、官庁訪問の情報を何も知らないまま当日を迎えてしまい、かなり不安な思いをしました。参加の有無で評価は決まりませんが、対面イベントに参加する価値は大きいと思います。

留学と休学

大学2年次から1年半留学し、帰国後半年休学をしたため、1年卒業が遅れました。卒業が遅れたことによって就活が不利になったと感じた瞬間は全くありませんでした。官庁訪問の面接で休学や留年の理由について聞かれたこともなかったと思います。民間企業の場合は4年で卒業して入社する人が大多数なので面接で留年の理由について深ぼられることもありましたが、国家総合職の場合留学等様々な理由で、4年以上かけて卒業する人が珍しくないのあまり気にされないのだと思います。他省庁ですが、インターンで同じ班になった6人のうち4人が5年卒業だったこともありました。

留学に行ったこと自体は後悔していませんが、公務員試験と留学の時期が重なり少し準備に苦労しました。私は2023年6月まで留学をしており、同年10月の教養区分を受験しました。帰国後から対策をしても間に合ったのかもしれませんが、絶対に教養区分で合格したかったので2月頃に試験対策の教材を実家から送ってもらいました。ですが3月から留学先の新学期が始まり、授業やテストに追われ、送ってもらった教材で勉強する暇はあまりありませんでした。また、空いた時間に、せっかく留学先にいるにも関わらず公務員試験の勉強をしていたのも非常にもったいなかったと後悔しています。難しいとは思いますが、可能な限り留学と公務員試験の時期が重なるのは避けた方が良いと思います。

ひまわりさん

民間企業と併願したのか、公務員専願だったのか

私は**公務員専願**で就活に臨みました。小学生の頃に地元・京都市の観光プロジェクトに携わった経験から、公務を通して世の中に貢献することに大きな憧れを抱きました。さらに、文化庁京都移転のニュースをきっかけに国家公務員を意識しはじめました。

2年生の頃は、**生まれ育った関西で働きたい**という思いを強く持っていました。そこで、**地方公務員と国家公務員一般職**（地方支分部局勤務）を志望していました。早くから志望を固めていたため、3年生の春には国家公務員一般職を受験し最終合格に至りました。

その後、各省庁の説明会に参加する中で、**責任ある立場で国家規模の政策を担う総合職の仕事**に心惹かれました。「人生一度きりだからこそ何事にも果敢に挑戦し続けたい」という自分のポリシーにも合っていると感じ、**総合職を志し始めました**。

3年生の秋に教養区分に挑戦しました。サークルの大会に向けた練習との両立に頭を悩ませながらも本気で取り組みましたが、不合格という結果となりました。

そこからは悔しさを糧に勉強し続け、4年生の春に法律区分で合格することができました。

公務員専願ゆえの後がないという不安は常にありましたが、公務に携わりたいという思いが固まっており、学業やサークル、アルバイトと忙しい日々を過ごしていた私にとっては最善の選択であったと考えています。

秋試験に合格していたら準備に余裕が持てたと思いますが、大学生活の自由な時間の中で、やりたいことをやり切ったので後悔はありません。**総合職の試験は、大学在学中に複数回挑戦できるので、自分にベストなタイミングを選択するとよい**と思います。

志望省庁・企業を決めたきっかけ

京都で暮らす中で、幼い頃から伝統文化や観光に強く関心を抱いていました。そのため、「**文化観光の推進と経済循環の創出**」を軸に、文部科学省・経済産業省・国土交通省を志望しました。この軸において、文化・経済・観光を並立に捉えていたため、志望順位の差はありませんでした。しかし、国土交通省は筆記試験の勉強や日程の都合で説明会に十分に参加できなかつたため、3日目に訪問することとしました。春試験後の限られた時間の中で、志望動機を固めること・関心ある政策を調べることを中心に準備しました。

国土交通省の官庁訪問は、訪問中に政策理解を深めるプロセスや、人柄を重視してくださったように感じます。そのため、説明会にあまり参加できず緊張していた私も等身大の自分で臨むことができました。

最終的に国土交通省に決めた理由は3つあります。

1つ目は**国民の暮らしに密接した政策に携われる**点です。私が日頃何気なく持っていた問題意識（特にオーバーツーリズムによる交通逼迫）と重なるお話が多く、政策への関心が非常に高まりました。こうした日々の問題意識を身近な暮らしの中に反映できる点に魅力を感じました。

2つ目は**地方出向でミクロな視点、本省勤務でマクロな視点の両方が持てる**点です。当初は、地元にも貢献したいとの思いから地方公務員試験も併願していました。しかし、国土交通省では出向を通して、国と地方の両方に貢献出来ることを知りました。さらに、地域で培った知見を本省に持ち帰り国の政策に還元できる点に惹かれました。

3つ目は**温かくも高い熱量を秘めた職員の方々の雰囲気**です。働く上で、同じ熱量を人と共有できていることが大事だと考えています。そのため、実際に職員の方々の雰囲気に触れたことで、一緒に働きたいと強く思いました。

公務員試験・官庁訪問は**自分と向き合える貴重な時間だった**と思います。大変なことも多いかと思いますが、その過程での成長も楽しみながら、ありのままの自分で臨んでいただきたいです。



S.Iさん

志望省庁・企業を決めたきっかけ

国交省を見始めた時期は、官庁訪問の2年前の夏からです。高校時代から地元のまちづくりに関心があり、大学入学当初は「地元を背負う仕事」として、地方自治体（市役所）で働きたいと思っていました。ですが、学部時代に留学を経験し、国際比較を通して、背負いたい対象が地元→日本全体に広がり、「日本の国土づくりをデザインする場所」として国交省を見始めました。

就活開始後は、民間企業を含めていくつか迷いましたが、日本を背負い、幅広く施策に関われる環境にいたいと感じ、国交省と経産省を第一志望候補に据えました。最終的には、官庁訪問で感じた①国民の命と生活を背負う【使命感】、②現場の関係者と何度も議論して政策を作り上げる【手触り感】、③政策が現場まで確実に実装されている【確かさ】を決め手に、国交省を選びました。

このように私は、最後は直感で就職先を選びました。そのことに後悔はありません。ある程度の就活軸、ビジョンは持ちつつも、最終的には「その瞬間に自分が感じた・考えたこと」に従って選択すればよいと思います。

民間企業と併願したのか、公務員専願だったのか

民間企業と併願をしました。スタートアップから大企業まで、業界も幅広く見ました。理由は、就活を始めた段階で、自分が公務員向きの人間か、民間向きの人間か、決めきれなかったからです。また、当時から志望していた国交省の関連業界（不動産・鉄道・航空等）の企業を見ておきたかったことも理由の一つです。

民間企業も検討して良かった点は「国家公務員として働く覚悟が生まれたこと」です。民間の本選考を通して、いくつかの企業から「君は官僚に向いている」と言われました。面接の中で「国への思い」が自然と滲み出ていたことに気づき、「自分は国家公務員が向いている」ことを、自信を持って語れるようになりました。

就活の大まかなスケジュールとしては、①夏前は民間就活、②夏はインターンと教養試験対策、③秋は大学院の活動と省庁分析、④年明けから民間の本選考、⑤4月初旬から国家公務員一本、という流れでした。

民間就活との両立で重要なのは「選考結果に引っ張られず、自分がそこで働けるかを常に考えること」です。官民間問わずフェアな目線で業界・組織分析を行えば、自然と本選考を受ける企業や省庁が絞られ、無駄な時間を割かずに済みます。

留学経験学生と大学院生に向けて

私は学部時代、日本→韓国→香港を1年かけて回る留学プログラムに参加していました。官庁訪問では、「なぜ留学に参加したのか」「考えがどう変わったのか」について頻繁に聞かれました。前者については「まちづくりを国際比較で勉強したかった」、後者は「もともと地方公務員志望だったが、国際比較を通して国家公務員志望になった」と答えました。

また、私は学部修了後、公共政策大学院に進学しました。官庁訪問中、院進の理由と勉強内容について聞かれました。特に「学部時代に就活をせず、院進を決めた理由」はよく聞かれた印象です。「社会に出る前に、専門知識や国際的な素養をつけることに専念したかった」と回答しました。

留学も院進も、「なぜそうしたのか」「そこから何を得たのか/学んだのか」を聞かれる点では、一般的な面接事項と変わりません。「自分らしさ」が伝わるエピソードをそれらに盛り込んで、面接官に沢山アピールしてみてください！



Mr.さん

志望動機の検討

私が最終的に国土交通省を志望するに至るまでの過程には、三つの段階があると思います。

1点目は、そもそもどうして公務員になりたいと思ったかという点です。これについては、中高の頃より生徒会や文化祭実行委員会、大学在学中にも大学新歓祭の実行委員会で活動した経験、特に裏方で様々な関係者をつなぎ調整し、まとめ上げていく仕事に携わっていた経験が大きいように感じます。そういった様々な人と時に衝突しながらも、大きなチームとなり何かを作り上げていく、成し遂げていくということに自分としてもやりがいを感じていました。幅広い人を巻き込んでいける、かつ社会全体をサポートしていける仕事に携わりたいと考えた時に国家公務員がまさにそれなのではないかと考えました。

2点目は分野についてです。小さい頃より地図が好きだったことがあり、かねてから地図を通して交通インフラや街の在り方などに関心を持っていました。また、縁あって鉄道会社や物流会社でアルバイトし、物流や交通の現場の裏側をほんの一部ながら覗くことができたことで、インフラの整備だけでなくそれを動かしていく仕事にも関心が広がったように思います。以上のような関心はありつつも、政策分野として国土交通省の所掌分野に絞るところまではいかず、就活では人々の生活を広く支えていくことのできるようなインフラを支えていけるような仕事がしたいという動機の形成に留まったと感じています。もちろん、国交省所掌分野への関心が著しかったのは間違いないですが、まだ**視野が十分に広いとは言えない中で分野を絞りすぎずに検討したい**と考えていたからです。

3点目として、それでもやはり国交省に決める決め手となったのは、組織風土です。様々な職員の方のお話をお聞きする中で、議論をいとわず、かつ現場や実際の人々の暮らしを第一に考える姿勢を随所に感じました。そして、それが様々なバックグラウンドを持った職員の方々、全国各地・世界中で活躍する職員の方々によって裏付けされており、国交省の一員となることで自らもそのような働き方ができるのではないかとということも感じました。私は、公務員として社会のために貢献したいと考え始めた頃より、地に足のついた、現実離れのしていない仕事がしたいというように考えていたため、まさにそのようなことができるのではないかと（続く）

強く確信したことが最後の決め手となったと今でも思います。以上のような過程を辿ったことで、**分野としての興味関心に留まらず、自分が実際に働いてみた際の姿を十分にイメージできるという感覚を得た上で志望先を決めることができた**ので、納得感のある志望省庁決めができたと思います。

官庁訪問に向けた準備(ES)

官庁訪問のESについては、合計1週間ほどで書き上げた記憶しています。自分のESについて、かなり特徴的なのではないかと思っている点については、志望動機の検討プロセスでも書いた通り、**領域としてのやりたいこと・惹かれるところというよりは、働き方、取り組み方としてのやりたいこと・惹かれるところにフォーカスを当てて書いたことだ**と思います。ですので、私の志望動機には仕事を通してどのような方向性で社会を良くしたいかということはありませんでしたが、具体的にこういうところをよくしたい、こういう分野に携わりたいということは一切書いてなかったと記憶しています。（もちろん前述の通り、個人的な興味はいくつかの分野に対して持っています。）こうした理由としては、説明会や様々な職員の方のお話をお聞きする中で、国土交通省では自分が興味を持っていなかった分野の面白さに気づき、のめり込んで行ける機会が多くあると感じたためです。そうした中で、自分としても分野への興味よりは、**どのような分野にも共通する国土交通省全体としての特性や、その中で自分に何ができそうか、何をしたいのか**ということに**アピールしたい**と考え、上記のような内容となりました。



S.Kさん

民間企業と併願したのか、公務員専願だったのか

公務員以外の民間企業についてもインターンや説明会などには参加していました。しかし最終的には公務員専願を選びました。私は元々、人々の生活を支えている制度や政策の新しいあり方を自ら立案したいという思いで就職活動を進めていました。そのような中で、インターンや説明会を通して民間企業は既存の制度や法律を前提とした活動をしている一方で、国家公務員ならば法律の改正を通して、既存の制度の抜本的な改革に関与することもできると感じました。このことから、**民間企業では、新しい制度や政策の立案を行なうことは困難であると考え、公務員専願を選びました。**

私の経験から感じた**公務員専願のメリットは、試験勉強に集中できる点**です。私の場合大学3年生の3月に、受けようと思っていた民間企業のエントリーと公務員試験が重なっていました。そのため、この期間中に民間企業に向けた準備をすることなく、公務員試験の勉強に集中できたことは、大きなメリットになったと思います。

一方で**公務員専願のデメリットとしては、内定を取る時期が遅くなってしまう点**です。公務員就活の特徴として、試験ごとの間隔が長いこと、内定のでる時期が民間企業よりも遅いことがあります。私の場合、国家公務員試験の第二次試験が終了してから最終合格の発表まで1ヶ月ほどかかりました。その期間中は何も選考が進んでいない中で、周りの友人は既に内定を得ているという状況になり、そこから生じた焦りは精神的に大きな負担となっていました。

以上のような私の経験を踏まえると、**民間企業も併せて検討することで、精神的な余裕を持ちながら就職活動を行なうことができる**と思います。

志望省庁・企業を決めたきっかけ

私は**社会の大きな変化の中で、人々の生活を支えている制度や政策の新しいあり方を自ら立案したいという思いで就職活動を行なっていました**。そのきっかけは、障がい者ボランティアを通して、日常生活を送る上で支援を必要としている人々の存在を知り、そのような人々の生活を支えている制度や政策の重要性を実感したことです。また大学の授業を通して、近年の少子高齢化やグローバル化といった社会変化によって、既存の制度や政策は**変革を迫られている**という問題意識を持つようになりました。そのため**法律の制定や改正を通じて、**(続き)

制度や政策を根本的に変えることができる国家公務員を目指すようになりました。

国土交通省を志望するようになったのは、大学3年生の11月頃でした。大学の社会保障に関する授業において、諸外国では住宅政策も福祉政策の領域に位置づけられていることを学びました。その結果、元々関心を持っていた福祉政策と国土交通省とのつながりに気づき、志望するようになりました。そのため**当初は、国土交通省を住宅政策やユニバーサルデザインの推進など福祉政策の一部を担う省庁と捉え、志望していました**。その後官庁訪問を通して、**国土交通省は生活に密着している多様な政策を所掌**しており、それぞれの政策が福祉政策とは異なる視点から、人々の生活を支えていることに気づきました。具体的には、都市再生制度を用いた生活施設の整備や、公共交通機関の整備を通じた病院や介護施設へのアクセスの確保などです。このように、**福祉政策にとられることなくより幅広い視点から人々の生活にアプローチできる**ということに魅力を感じるようになりました。

最終的には**国土交通省でならば、自分の関心がある福祉政策に携わりながら、それ以外の多様な側面からも人々の生活を支えていくことができる**と考え、入省することを決めました。

官庁訪問に向けた準備(説明会)

私が国土交通省を志望するようになった時期は、大学3年生の11月頃と遅かったため、参加したイベントは11月の霞ヶ関OPENゼミと官庁訪問直前の最終講演会だけでした。そのため官庁訪問前は、**国土交通省に関する情報が不足している点に不安を感じていました**。単なる政策的な知識に関しては、白書や審議会の資料を通して補うことができます。しかし、**実際に職員の方がどのような考えを持って業務を行なっているのか、職場の雰囲気はどのようなものなのかなどの情報は、説明会やインターンに参加しなければ得られないもの**だと思います。私はそのような情報が不足していたために、国土交通省について政策的な知識しか持っておらず、不安に感じていました。

またインターンや説明会は、単に情報を得る機会であるだけでなく、**同じ省庁を志望している他の就活生と交流することができる機会**でもあります。私の場合周囲に公務員志望の人がいなかったため、説明会やインターンでの交流を通して、併願先や参考書などの情報収集をしていました。

以上のように説明会やインターンに参加することは、その省庁に関する様々な情報を得ることができる点、他の就活生との交流ができる点において、大きなメリットがあります。そのため、**積極的に参加することをおすすめ**します。

MMさん

民間企業と併願したのか、公務員専願だったのか

官庁をメインとしながら、民間も併願していました。最終的には、建設・鉄道など国交省に関連した業界を数社受けました。3年生の冬ごろまでは、民間就活へのモチベーションや理解度も低く、何となく公務員に近いと（当時は）思っていたコンサル・シンクタンクの早期選考を受けていましたが、選考が進む中で自分には合っていないと感じ、大学の先輩のアドバイスも受け、国交省に関連したインフラ業界を受ける方針にシフトしました。年明けからは、その中でも興味を持つことができた建設・鉄道に絞り、インターンや説明会に参加しました。あくまでも官庁対策に力を入れていたので各業界で2〜3社ずつ選考を受けるにとどめ、何とか春休み中に内々定を1社からいただいていた形です。

振り返ってみて、**民間就活を行って良かったと思っています**。その理由としては、面接やESに慣れたこと、精神的余裕が生まれたことなどありますが、**国交省や国家公務員の志望動機を考える際に民間就活の経験が大いに役立ったことが大きい**です。特に私は国交省に関連した業界を受けていたため、民間と官庁の違いは何か、自分はどちらを行いたいのかなど、志望動機に深みを出すことができたと思っています。当初は、民間と官庁の違いについて、私益か公益かという違いしか見出せていませんでしたが、官庁であれば特定の顧客や地域・業界に捉われず全体をカバーした業務を担えることや、反対に民間企業でも公益に大きく資する業務を担えることを感じました。このような思考プロセスを経ることができたからこそ、自らの志望動機を明確化することができたと思います。

志望動機の検討

私が国土交通省を志望した理由は以下3つにまとめられると思います。

1つ目に、**防災政策に携わりたかったこと**です。私は地元が昔から災害に脆弱な地域であり、南海トラフ地震などで大きな被害が予測されていることから、元より防災に関心を持っていました。とは言っても、実際の被災経験などのいわゆる「原体験」になりうるような出来事はなく、また就職活動を始めた当初から防災に携わりたいという考えを持っていただけではありませんでした。他省庁や民間を含めて様々な選択肢を見る中で、自分がこれまで防災に関心を寄せてきていたことに気づき、地元や地元似た状況にある地域を災害から守りたいという思いや、（続く）

将来災害が起きた際にただの被害者・傍観者ではなく対応する側に回ってほしいという思いを持つに至りました。国交省は、基本的にどの局の政策も防災との関わりがあり、また防災庁や復興庁、最前線で災害に対応する地方整備局や地方自治体に出向できる機会もあることから、自分のやりたいことを実現できる場所だと考えています。防災が様々な部局の横串をさす政策であることは、官庁訪問中の原課訪問でも実感することができました（観光や運輸、道路など）。官庁訪問前までは、関連した工学部の授業を履修してみたり、東日本大震災の被災地を1人で巡ってみたりして、自身の考えを再確認する機会をとっていました。その中で、東日本大震災時の東北地方整備局の道路啓開の話に感銘を受け、改めて国交省への志望を固めたことを覚えています。

2つ目に、**国民の暮らしに近い業務を担いたかったこと**です。国交省の政策分野は、すべての国民の日常生活を形作るものであり、政策の成果が目に見えて実感しやすいという特徴があるように思えます。この考えを持ったのは、他省庁や民間企業を見ていたことが大きいと思います。例えば、私は就職活動を始めた当初、財務省や防衛省も見ていましたが、「財政」「平和」など漠然としたものよりも、1人1人の暮らしに根付いた具体的なものが自分には合っていると感じました。また、民間の鉄道会社やゼネコンを見ていましたが、特定の地域や顧客、分野に捉われるのではなく、全てを対象としている官庁に惹かれるようになりました。このように、**他との比較によって、自分に合っているタイプが見つかった**と記憶しています。

3つ目に、**国交省の政策分野の幅広さに魅力を感じたこと**です。採用イベントなどを通じて、知らない分野に入って、新しいことを吸収していく過程に楽しさを感じることに気がつきました。その意味で、他の省庁と比べて段違いの幅広さを有している国交省が合っているのではないかと考えました。一方で、幅広い中でも、どれも生活に密着したもので関心を持ちやすいのも特徴だと思います。官庁訪問中でも、住宅セーフティネットや不動産IDの話など、**これまで知らなかったものの少し話を聞くだけで興味が出てくる**という場面が何度もありました。

最後に、私は農水省も最後まで併願していたため、同じ選択肢で迷っている方がいれば参考になるかと思ひ、国交省との比較を書ければと思います。国交省を選んだのは、上に記載した通り防災などの理由もありましたが、それ以外では**都市から地方まで全ての地域に向き合うことができることや、産業と暮らしのバランスが良いと感じていたこと**があります。前者については、地方や農村に特化するのも面白そうでしたが、人口減少が進む中ではより広範な地域を俯瞰の方が個人的には重要に感じられ、また今や殆どの人口が存在する都市部の課題にも携わりたいと思いました。（続く）

もっくもくさん 官庁訪問に向けた準備

国家公務員を進路の選択肢として考え始めるまで「官庁訪問」という言葉に触れる機会はほぼないと思います。私もそうでした。字面だけ見てもピンと来ないし、採用活動には特殊なルールがあるらしいし、何をすればいいんだろう、と志望し始める段階で少しハードルを感じたことを覚えています。

官庁訪問は一般的な就職面接と比較して独特な面が目立ちますが、実際のところ**必要な準備は民間就活とほとんど変わらず、大まかに区分して「自己分析」「官庁研究」「面接練習」の3つです。**

私の場合、「自己分析」は修士1年の秋頃、民間企業のインターン選考と並行して行い、過去の経験や自分の強み弱み、価値観を本選考前に理解しておくことを心がけました。

「官庁研究」は、修士1年の夏頃、いくつかの省庁説明会にオンラインで参加し始めたほか、前年度の官庁訪問で内々定を貰った先輩方に志望動機や官庁訪問のエピソードを聞いてみるなどして、霞ヶ関全体と官庁訪問へのイメージを少しずつ固め、日経新聞で関心のある省庁に関連したニュースには目を通し始めました。「自己分析」の結果と照らし合わせ、興味のある官庁が絞られてきた修士1年の冬以降、冬季インターンや対面イベントに出てみて、他の志願者や職員の方の雰囲気や基に最終的に訪問する省庁を決めました。

「面接練習」に関しては、人によって必要な対策が違いすぎてどの程度参考になるかは分かりませんが、私は元々民間就活を経験していて面接のお作法や初対面の人と話すこと自体にそこまで問題はなかったため、官庁訪問の2,3ヶ月前から自分のESを見せて先輩や友達に官庁訪問を想定した面接練習に何度か付き合っただけで対策しました。

なぜ民間ではなく公務員なのか、なぜ地方ではなく国家なのか、なぜこの官庁を志望しているのか、これらを自分の熱意を**自分の言葉で論理的に相手に伝えること**を目標に準備し、官庁訪問に臨むと良いと思います。

後者については、産業と暮らしのバランスが、農水省は産業よりに感じたのに対し、国交省は丁度良いように感じました（完全に個人の感覚です）。これらの理由から、国交省を第一志望として官庁訪問に臨みました。また、人の雰囲気もこの2省でかなり違うように思われるので、ワークショップなどを通じて実感することをお勧めします。

志望省庁・企業を決めたきっかけ

私が国交省を志望したきっかけは、**3年生の夏にサマージョブに参加したこと**です。当時は、国家公務員を目指すことははっきりしていたものの省庁は絞れておらず、夏休み中の採用イベントなども4~5省に参加していました。しかし、申し込み時の志望動機がどの省よりも書きやすかったことや、5日間のサマージョブがとても楽しかったことから、国交省を志望し始めたことを記憶しています。

サマージョブで印象に残っているのは、5日間で感じた考えの変化です。私が参加した回は上下水道がテーマでした。初日にテーマが発表されたときはかねてからの関心も知識も無かったのですが、職員の方の説明や政策立案体験、現場訪問などを通じて「上下水道行政」の面白さを大いに感じました。このように、国交省の政策分野は幅広く知らない分野が多いと思いますが、**どれも生活に身近で、知っていくにつれて興味が出てくるのが特徴**だと思います。

この他、職員訪問をした際にも同じような体験をすることができました。また、**職員の方々が国交省の政策の幅広さを心の底から楽しんでいる**ということが伝わってきたことも、志望を固める上で大きかったと思います。

春雨さん

志望動機の検討

はじめに、自分の中で譲れない志望動機の「核」のようなものを検討しました。私の中でそれは「災害で苦しむ人を減らす」ことでした。次に、その核となる思いを抱いたきっかけを辿り、自らの核の正体をより鮮明なものにすることを試みました。私の場合、きっかけとなったのは東日本大震災の被災地に赴いたことと、令和6年能登半島地震のボランティア活動でした。これらの経験を通じて災害によって街の活気が失われ、衰退し、住民の生活がより困難なものになっていく様子を目の当たりにしたことで、災害が他人事ではなく、「自分ごと」であることを認識しました。つまり、私の志望動機の真の核は、「いつでも自分が当事者になりうる災害への問題意識」から出発したものであり、それを希求する結果として「災害で苦しむ人を減らすことができる社会を創出する」ことが位置付けられたものであったのです。

次に、先述した社会を創出するために、**なぜ国土交通省を志望するのか**、ということを考える必要がありました。私の場合これは、採用イベントへの参加や、その際に職員の方々とお話しさせていただく中で自然と固まっていきました。この過程において個人的に最も重要な意味を持ったのが、国土交通省を「知る」ことです。これは単にその所掌を知ることのみならず、その所掌間の連携によって実現していることや、他省庁との関わりの中で実現していること、あるいは国土交通省の内部で実際に働いている職員の方が、どのような人で、どのような考えを持っておられるのか、といったことまで、多岐にわたります。私はこのようにして、その所掌の広さやハード面への働きかけの強さ、さらには防災に熱い思いを抱く職員の方の存在など、まさに自らの志望動機となるようなことを知ることができました。また、それに伴って防災に限定されていた自らの視野を拡張することもでき、多種多様な分野間の関わりによって政策を実現する、という国土交通省の特性にも強く惹かれるようになりました。

最後に行ったのは、**他省庁・民間企業での実現可能性を探ること**です。当然、「なぜ国土交通省でなければならないのか」ということは疑問として生じます。例えば鉄道分野であれば、民間企業での実践が可能ですし、政策を実現するにあたっては他省庁も選択肢として考えられます。この過程において私は、2つ目のプロセスで知り得た国土交通省の強みから逆算し、自らの理想とする社会の実現に必要な不可欠である要素が全て揃っていることを確認しました。

また同時に、他省庁や民間企業の採用イベントに参加する中で知り得た強みが、自分の志望動機の核とミスマッチであることを認識しました。

結びとして、みなさん志望動機の検討で悩まれることが多いと思いますが、その時は一旦原点に立ち返り、思わず自分の口をついて出る、想いの核と言えるものを再認識することから始めてみてはいかがでしょうか。いつかみなさんと道を同じくする時を心待ちにしております。

官庁訪問に向けた準備(面接)

まず、**ESを用いた自問自答**から始めました。志望動機の核となる考えや、関心分野、あるいは国土交通省の見え方など、様々な質問を想定し、それに対して**自分の言葉で答える**、というプロセスを何度か繰り返しました。この過程では、可能な限り客観的な視点から自らのESを眺めることと、**端的かつ正確な回答**の検討を意識しました。これを行う中で、自らの志望動機で不十分な点や、検討しきれていない点などを発見することができ、志望動機のさらなる深化につながりました。

次に、**AIを用いた壁打ち**を行いました。これは主にESの伝わりづらい点や、書き方が不明瞭になってしまっている点の発見に役立ちました。表現が厳密でなく、正確な意味が捉えにくくなっていった点を自覚することができ、面接対策になっただけでなく、自らの言語表現の精密化も進めることができました。

最後に、**他の志望者との面接練習**を行いました。私は幸いにして採用イベントで知り合った国土交通省志望者と面接練習を行うことができました。ここでは、互いのESを読み合いながら疑問に思った点や掘り下げたいと思った点などを質問し合い、時間を設定して(確か一人30分ほど)本番に近い形での面接練習を行うなど、様々な形態で対策を行いました。やはり他者の、真に客観的な視点からの質問は鋭く、思わぬ点で自らの志望動機を検討しきれていないことが明らかになることが多々ありました。また、他の志望者が関心を抱いている分野に関する興味を刺激され、官庁訪問前に視野を広げる一助となりました。

私が行ってきた面接対策が必ずしも正しく、効率的なものであるとは思いません。ですが、**なりふり構わず頼れるもの全てを頼った姿勢**は、評価できるものなのではないかと考えています。特に、他の志望者との面接練習は特におすすめです。志望動機とは、おそらく自らの内面に深く潜って作っていくものだと思います。だからこそ、他者の、それも同じ方向を見ている者の視点から出た質問は鋭く、良い刺激になります。官庁訪問は(おそらく)そこまで殺伐としたものではありませんし、他の志望者を蹴落とすことを意識する必要があるようなものではありません。ですから、**周囲の志望者と連携して、官庁訪問に挑んでみるのはいかがでしょうか。**

(続く)

実は私が国土交通省を志望するようになったのは、留年が決まった大学3回生の冬でした。私自身、もともと哲学を専攻していたものの挫折し、逃げるようにして地理学を専攻しました。その中で災害研究に出会い、自らの手で、災害で苦しむ人を減らせないものかと考えるようになりました。そんな最中、令和6年能登半島地震が発生し、ボランティア活動に赴きました。そこで目の当たりにしたのは、災害研究の中で繰り広げられる災害モデルではなく、生の人間が苦しむ本物の災害でした。被災地一つ一つに個別の問題が生じ、被災者一人一人が個別の悲しみを抱える、そういったものでした。この経験は私が強く国土交通省を志望するきっかけになりました。また、この経験は（結果論的にはなってしまいますが）留年を経て、自らの道を見つめ直したからこそ生まれたものであると考えています。

私たちの目の前で展開されている現実、どこか焦燥感に溢れたものであるように感じられます。街中に溢れる広告や、毎日休まずメールボックスに届く就活サイトからのメールなど、さながら社会が我々に最短ルートを通るように誘導しているかのような日常にあっては、なかなか自らの原点を見つめ直すことは困難のように思われます。私は幸いにして(?)留年という機会をもってようやく立ち止まることができましたが、多くの人にはそんな回り道をしている余裕はないと思われそうです（する必要などないです笑）。ですが、今の自分が見えている道の他にも多くの道が伸びていて、またそれらの行先は思わぬところに繋がっている、ということ意識しながら日々を過ごすだけでも、どこか落ち着いて自らを見つめ直せるのではないのでしょうか。人生の岐路に立つみなさんだからこそ、見えるものはたくさんあるはず。今見えている道に邁進することも非常に重要です。ただ、その前に一度、立ち止まって、肩の力を抜いて、周りをゆっくりと見渡してみたいかがでしょうか。そこに思わぬ発見があることを願っております。

雉子さん

就活の軸と志望省庁を決めたきっかけ

大学1年の時、直感的に国家公務員を志しました。

「人生を振り返った時に後悔しないためには、国民や国益にストレートに資する人生にしよう。そして、1人でも多くの国民が『この国が誇りだ』と思う国であるように」と強烈に感じ、この直感に従って官庁訪問までを過ごしました。

就職活動中は、民間企業の就職活動をほとんど行いませんでした（後述「就職活動の後悔とアドバイス」）。リソースの全てを官庁の採用イベントに割き、大学2年から経済産業省や他省庁の採用イベントに参加していました。講演の全てがワクワクする魅力的な政策ばかりであった一方で、次第に**国民への届きやすさや、政策が届いた上で国民が実際に行動変容を起こしているのかを意識するよう**になりました。国土交通省は、国民が生活する上で利用するあらゆるモノが政策領域であることを知り、政策の国民への届きやすさを感じられたことが、国土交通省を見始めたきっかけです。

官庁訪問に向けた準備(説明会)

大学3年の夏休みにサマージョブ(1 day)に参加して以降、可能な限り採用イベントに参加していました。就活ノートのものは作らず、説明会資料の余白に、説明を聞いた上で、**魅力的に思えたところと、魅力的でないところを簡単に書き留め**、少しずつですが整理していました。人事の方との個別相談会はありましたが、なかなか参加できなかったため、代わりに**説明会后に感想を伝えたり、直接お話しする時間をいただいたり**していました。

また、官庁訪問に向けて政策を網羅的に勉強することは得意ではなかったため、政策知識をインプットすることは避けていました(笑)

なので、国土交通省の政策を詳しく知ることも、「**自分の理想の国家像を実現する上で、国土交通省の政策とどこが重なるのか**」を意識するようになっていました。その上で、説明会や職員の方のお話の中から自分の理想像に直結する政策領域が見つかった場合は、重点的に深掘りするようにしました。

説明会を除いて特に印象に残っている採用イベントは、2月と3月に開催された**宿泊型ワークショップ**です。この宿泊型WSでは、**令和8年度入省の同期を含め、霞ヶ関を志望する多くの友人と出会うきっかけになりました**。国土交通省の他の採用イベントと比べて、人事の方や職員の方、霞ヶ関同期の方と交流する機会が沢山用意されています。ぜひ参加してみてくださいね!

官庁訪問の準備を進める中で、当然ですが、「なぜ国家公務員を専願しているのか」を言語化し、相手に伝え理解してもらう必要と直面しました。民間就活をしない選択をとったことに甘え、「なぜ行政官になりたいのか」という質問に、その場では言葉を適当に並べていましたが、本心では「私の心が行政官と言っているから！」という言葉しか出てこない酷い状態で大学4年春先を迎えてしまいました。行政官としての熱意がなぜ自然と湧き出てくるのかを言語化するために、生い立ちを振り返り「なぜ？」を考察する作業を何度も繰り返し、自分自身とじっくり向き合いました。言語化に苦しんでいる方は少しずつ過去を遡り、知人の経験と比較してみてください。

志望動機に関しては、「自分の理想の国家像」と現実との乖離や課題を指摘した上で、実際に国土交通省で働きたいことを書く構成をとりました。自分の理想像を実現するためのアプローチが国土交通省は多様にあると意識しながら、最終的な志望動機を書き上げました。

自身の志望動機を簡単に紹介したいと思います。私の原点である「1人でも多くの国民が『この国が誇りだ』とっていて欲しい」という感情をさらに言語化し、「国民が各々の『心地よい場所』で暮らしを築き、この国で人生を過ごして幸せだと感じられる社会」を理想像としました。一方で、足元では、機会に恵まれる東京圏での豊かな生活を求め人口が集中しているが、結果として経済的なゆとりが失われ、「心地よさ」の矛盾が生じていると指摘した上で、この矛盾の解消のため「地方創生」に関心があると記述しました。そして、地方創生の前提となる生活基盤を守りつつ、新たな発想で地方創生に取り組むことが国土交通省で出来るため、志望すると締めくくりました。

就職活動への後悔とアドバイス

公務員専願であっても、民間企業の就職活動をすることを強くお勧めします。選考を受けるかどうかは人それぞれですが、少なくともOB訪問はしておくべきだったと後悔しています。民間企業から見た行政機関の役割や期待を知る機会を逃してしまったことを、今でも後悔しています。

民間企業と行政期間の違いの本質はどこであるのかを意識せず就職活動の終盤を迎えてしまいました。大学4年4月、5月の官庁直前期に、民間企業に就職したサークルOBや内定を得た友人にひたすら「何故民間企業に行こうと思ったのか?」「民間企業への就職活動を通して実感したこと」等を聞きまわり、急足で民間企業と行政機関の違いを自分なりに言語化していきました。

院生失格さん

民間企業と併願したのか、公務員専願だったのか

私は民間企業との併願で就職活動を進めました。新卒として就職できるのは一度きりの機会だと思ったことが理由です。もちろん国家公務員が第一志望であり、その思いは最後まで変わりませんでした。しかし、民間もしっかり見ておかないと、せっかくの機会を活かせずもったいないのではないかと考え、結果として民間企業や独立行政法人（以下「独法」）の選考にも臨みました。

振り返ってみると、そこまで時間をかけて手広く民間就活を行う必要はなかったかもしれません。最後は1箇所しか入社（入省）できないし、公務員から離れた完全な民間は、語るべき志望理由などが公務員と変わってきてしまい、少し負担になってしまったかなと思っています。ただ、自分のやりたいことはやはり公務員だと再確認できた意味では有意義でした。特に独法を見たことは、政策を「立案」する立場と「実施」する立場の違いを理解するきっかけとなり、公務員を志望する気持ちを強める良い経験になりました。

また、私は心配性だったこともあり、独法から一つ内定をいただけたことは心理的に非常に大きな支えとなりました。官庁訪問一本に絞ると、最後まで「もし落ちたら就職浪人かもしれない」という不安がつきまといま。セーフティーネットとして一つ内定を確保してから官庁訪問に臨めたのは、自分にとって良かったと思います。さらに民間就活はESの書き方や面接練習にもつながり、公務員就活にも役立ちましたので、個人的にはぜひやってみることを強くおすすめします。

公務員では、他省庁も並行して検討しました。これも、どこで自分の関心や適性を発揮できるのかを見極めるうえで重要な経験だったと思います。私は最終的に4つの省庁に絞って説明会やイベントに参加し、官庁訪問ではそのうち3つに絞って訪問しました。正直に言うと、第4クール頃には疲れ切って記憶も曖昧になるほどでしたが（笑）、それくらい力を尽くしたことで自分の適性や各省庁の雰囲気などを知ることができたので、最終的に国交省に後悔なく決めることができたと感じています。

自分は大学院生であり、なおかつ民間・独法・官公庁と全てみていたため、かなり欲張りな学生生活をしていました。（おまけに学部生時代に就活をしていなかったため、ESの書き方なども本当に知識ゼロからスタートだったので大変でした…。）そのため就職活動全体を通じて、時間との勝負&体力をいかにキープするかの戦いでした。具体的な進め方としては、志望度がそこまで高くない民間企業については、基本的にオンライン説明会や大学キャリアセンター主催のイベントに絞って参加し、時間や体力をセーブしていました。（続く）

というも、夏には省庁のインターンや教養区分の勉強などに時間を取られるため、後期には民間就活にあまり割けなくなると考えていたからです。

一方で、省庁や志望度の高い独法が主催するイベントにはできるだけ対面で参加し、とくに宿泊型のような大型イベントには積極的に臨みました。逆に言えば、後期は民間に時間を割けず、教養区分の対策や官公庁・独法のイベント参加が中心となりました。今から振り返ると、この段階で自分の進路は民間ではなく独法や省庁に向かう方向に固まっていったと思います。また、教養区分に合格しておいたことで、その後の本選考期には独法や省庁の就職活動に集中でき、精神的にも余裕が持てたのは大きな利点でした。本選考が解禁された後は、独法や民間のES執筆、省庁のイベント参加に追われる日々でした。もちろん時期によって力点は変わりますが、自分の経験からすると、**限られた時間の中でメリハリをつけ、志望度やスケジュールに応じて取捨選択することが非常に大切だ**と感じます。

公務員就活特有の難しさとしては（もちろん試験を受けて突破しなくてはいけないのも面倒ですが）、なによりも**6月まで合否が決まらないこと、そして官庁訪問独特のプロセスにまつわる噂が飛び交うこと**です。（特に後者は地味に響きました・・・流されないメンタルも大事です・・・）

周囲が早期選考でどんどん内定をとる中、不安に駆られる時期はありました。ただし、独法など公務員に近い業界では選考が比較的遅めなので、3月以降の本選考で内定を得て安心材料にすることは十分可能です。噂も気になるとは思いますが、結局は自分が最後にやりきった結果がすべてなので、自信を持って臨むことが一番大切だと思います。皆さんが全力でぶつかっていけば、人事課の方々が皆さんをしっかり見て評価してくれています！

自分が今から就活期に戻ってもやはり民間就活は行いますが、もう少し独法や志望度の高い業界に絞って効率的に進めると思います。また、志望度の高かった独法や他省庁への対策に、もっと時間をかけたかなと思います。

就活軸の検討

私の就活の軸は、「今後50年、日本がアジアにおける自由民主主義のパワーであり続けること」に貢献できるかどうかでした。そのため、自分の関心は常に公益性の強い分野に向いており、直接的に社会課題の解決に携われる環境を選びたいと考えていました。

そのためには①日本の地位を対外的に高めること、②日本の衰退を少しでも食い止めるための国内課題解決の2つのアプローチがあると考えました。（続く）

そのため①の軸から外務省と経済産業省、②の軸から国土交通省と総務省（自治分野）を見ていました。

最終的に国土交通省を志望した理由は、国内における人口減少の大きな要因である「地方からの人の流出」という課題に、最もダイレクトに取り組めると感じたからです。民間就活でも軸そのものは一貫しており、民間か公務員かというよりも「公益性にどのように関われるか」を常に重視していました。そのため民間や独法、官公庁の説明会に積極的に参加しましたが、やはり**予算と法律を持って政策を立案し、自治体や民間アクター含めて幅広く公益性の実現のために動かしていける官公庁は唯一無二の仕事だ**と思い至り、入省を決意しました。

志望省庁・企業を決めたきっかけ

就活軸との関わりで言えば、私の目標である「日本が民主主義のパワーであり続ける」ためには、①対外的に日本の地位を高めること、②国内で人口減少による衰退を食い止めること、の両面が必要だと考えました。国土交通省は、地方の衰退という日本社会の根本課題に対し、多様な現場やツールを持って政策を進めている点に大きな魅力を感じました。

国交省を具体的に意識し始めた原体験としては、小さい頃から空港に行くことが好きだった（羽田空港の立地する大田区で育ちました）ので、そこにいくたびに見かける「国土交通省関東地方整備局東京空港整備事務所」の看板を見て、こんな大きなインフラに関わる仕事をしているところなんだなと意識したのがきっかけです。その後大学院で国家公務員を本格的に意識し始め、先輩や大学院に教えに来られていた先生方のお話を聞き、ますます面白そうだと感じてから本格的に志望し始めたと覚えています。こうした実際に眼に見えるフィールドで仕事ができるという現場への近さ、それによって自分の打った政策が日常生活に反映されるという国交省の大きな魅力を感じたため、国交省を志望するようになりました。（そうした実際の日常が自分の仕事によって目に見えて変わった体験は国交省のイベント等で先輩職員さんに伺うとたくさん聞けるとは思いますよ！ぜひ積極的にきいてみてくださいね！）



K.T.さん

民間企業と併願したのか、公務員専願だったのか

民間と併願しており、鉄道、物流、エネルギーなど、インフラ系の企業や、独立行政法人を検討していました。元々の併願理由は、国家総合職の試験・官庁訪問に不安なく臨むための「保険」を作ることでした。実際、自分の心配性な性格にとってはこのやり方は合っていたように思います。前述の通り、元々は「保険」の意味で始めた民間就活でしたが、検討してよかったと思うことは2つあります。

1つ目は、「省庁以外の視点も得られたこと」です。マクロな視点で日本を視ることができる国家公務員だけでなく、企業で実際に事業に取り組んだり、独立行政法人で行政と企業の橋渡しになったりすることにも興味を持つようになりました。正直、他の選択肢も増えたことで、公務員になることに迷いが出た時期もありましたが、その悩みも、本当に自分のやりたいことを考え直すために必要な時間だったと思っています。

2つ目は「人と話すのに慣れたこと」です。民間就活のためのOB・OG訪問や面接を経て、就活の中での「会話」に慣れたことは、最終的に官庁訪問に活かすことができました。

民間就活と公務員就活を両方向うにあたって、両立というよりは、時期によってどちらかに比重を置いて(8:2ぐらい極端に)就活を進めていました。具体的には、2024年1月から5月までは公務員試験の勉強、2024年6月から2025年1月までは民間就活、2025年2月以降は公務員試験の勉強と官庁訪問対策に重点を置いていました(この期間は、部活動やアルバイトなど就活以外のことはほとんどしていなかったため、他の方にどれほど参考になるかわかりませんが・・・)。

就活軸の検討

「人々の生活の根底を支えられる」仕事がしたいと思っており、国家公務員やインフラに興味を持っていました。その中でも、特に二つのことを意識して就活を行いました。

1つ目は、「私がやらなくてはいけない」と思える仕事かどうかです。基本的にどんな仕事でも、自分がその仕事につかなくても、極端に言えば、他の人で替えがきくと思っています。その考えだからこそ、自分がやらないういけないという使命感が私の中では、非常に重要でした。(続く)

私は、政策立案のような、マクロな「仕組みづくり」に非常に興味があります。「仕組みづくり」とは、現状と課題の分析と理想の設定を行い、そのギャップを埋めるための施策を考えることです(ある省の政策講演で、政策のフレームワークについてこのような話をよくしており、自分の今までやってきたことの言語化としてぴったりだと思い、そのまま使用させていただいています)。これに特に当てはまっているのは国家公務員だと思っています。「仕組みづくり」私が、これまでの人生で大切にしてきたことであり、自分がやらなくてはいけないことだと思って就活をしていました。この軸に関しては、民間の就活ではあまり当てはまっていないため、最終的に公務員を選んだ理由の一つにもなりました。

2つ目は、「組織の中で自分の個性を発揮できそうか」です。私が自分自身の個性だと思っていたことは、「体育会系部活」、「留学経験」、「インドネシアのことを勉強」でした。「体育会系部活」の個性を活かし、一人に裁量権が強く与えられる職務よりも組織的に働く仕事を選んでいました。また、「留学経験」を組織の中でより活かすために、「ドメスティックだと思われがちだけれども、意外にも海外事業をやっていたりやろうとしたりしている」企業を探していました。しかし、現実には、このような会社は多くなかったため、最終的には、このような会社に加えて、海外事業を多く行うような企業も受けました。また、インドネシアでの事業に取り組んでいる、あるいは今後取り組もうとしているところは積極的に受けていました。

志望動機の検討

志望動機の中では、基本的に大学の専攻の話はしていませんでしたが、「インフラに関わりたい」と思った原体験として、留学のことをよく話していました。

具体的にはインドネシアでの留学において、日本と比較した時の「不便さ」についてです。インドネシアでは都市部に近い場所であっても、道路が曲がりくねっていたり、歩行者用の通路がなかったりした場所が多く残存しています。このような経験を通し、日本でそれまで享受してきた「当たり前の日常を支え続けるインフラ」が全く当たり前のものではないと感じ、これを支えることが、私が働く上で大切にしたいと考えていた、「人々の生活の根底を支える」ことに一番つながっていると考えました。

また、これ以外には、インフラの海外輸出の話もよく話していました。インドネシアでの留学中に日常的に利用していた鉄道は、日本の鉄道の中古車を譲渡したものでした。日本のインフラ技術が実際に海外でも活躍している姿を目の当たりにし、自分もこのような仕事に関わりたいと考えるようになりました。(続く)

公務員を意識したきっかけについても、大学の専攻とは関係なく、部活動での「仕組みづくり」の経験に紐づけて話していました。

非法学部出身だったことが就職活動における有利不利につながったことは特になかったと思います。私の専攻がインドネシア語だったので、基本的に面接の一番はじめの質問で、「なぜインドネシア語を選んだのか」という質問をされるが多かったことは、就職活動に有利に働いていたかはわかりませんが、面接の対策が少しだけ楽にはなったと思います。また、不利だったことは、公務員試験の対策に、大学で今までやってきたことはほとんど何も活かせなかったことで、一から勉強しなくていけないことが多かったことぐらいだと思っています。

#春試験 #民間企業も就活 #3日目

#農林水産省 #総務省(自治) #留年

ばしこさん

民間企業と併願したのか、公務員専願だったのか

国家公務員は以前から第一志望で、面接慣れや省庁との差別化を知るために、政府系金融機関やコンサルティング業界を併願していました。

面接に慣れることができたほか、省庁と民間の違いも少し知ることができ、良かったなと思います。公務員試験は春試験を受けていたため、両立は不十分な点が多かったですが、**優先順位を間違えず**に進めました。

公務員就活の独特な点として、**将来の国の理想像や**、そのために必要なことを聞かれることがあった点が挙げられると思います。説明会や採用パンフレット等で、**日ごろから考えておくことが大切だ**と感じました。

志望省庁・企業を決めたきっかけ

父の実家がある地域が衰退していく様子を目にし、地方に重点的に携わることができる仕事がしたいと感じていました。そのため、国土交通省や農林水産省、総務省を中心に説明会等に参加していました。

(後述のように、)就職留年をしていたため、国土交通省は2023年の10月ごろから見始めました。

民間就活を経て、国家公務員として、制度設計に携わることができる点に魅力を改めて感じました。

最終的に、①具体的な所掌産業があること、②**農村の振興は、インフラや観光を所掌している国土交通省でもアプローチができること**、を理由に、国土交通省を選びました。

就職留年について

私は昨年の春試験で不合格となってしまったため、就職留年をして、再チャレンジをしています。

試験勉強に加え、官庁訪問対策、民間就活など、バランスよく進めなければならず、**省庁の採用担当や知人も相談**していました。

また、私の所属していた学部の制度上、卒業論文の執筆と就職活動を並行しなければならず、学業とのバランスを取ることは腐心しました。

一方で、大学の同期など、就職活動をすでに終えている**知人にアドバイス**をもらえるなど、活かせる点もありました。

孤独にならないよう、周囲の人をうまく頼りながら進めることがコツだと思います。

アラカルトさん

志望動機の検討

自分の所属する学部・コースは、社会学・政治学に代表されるような社会科学を中心に、さまざまなデザインプリンについて学際的に考察する、ということテーマに掲げているところでした。元々、大学は経済学部への進学が中心の科類で入学したものの、学習を進めていく中で、数理的な操作で理論化を考える/理論から実態を解釈しようとする経済学的手法に自分の肌感が合わないと感じ、経済学部以外の学部へと進学しました。

この例から言える通り、**自身の関心は「生身の人間」であり、「実際の生活」**にありました。そしてそこが、志望動機を形成する重大な要素となりました。(勝手なイメージですが)市場の分析をし、売上げの分析を行う民間企業はどちらかと言えば自分がかつて避けた「理論的」な雰囲気を感じ、(これもまた勝手なイメージですが)各地に確かに存在する「生身の人間」の声を拾い、「実際の生活」を国家全体から支える国家公務員が自らの性に合うと感じました。こうして、自然と国家公務員に志望が固まっていきました。

志望省庁・企業を決めたきっかけ

国土交通省を訪問したのは官庁訪問3日目でした。元々、総務省・農林水産省を第1クールで見ました。これらは、地方創生に関連する仕事を通じて多種多様な暮らしの様相を示す地方を活力あるまま次世代に残したいという想いから選んだ訪問先です。総務省は「地方を真正面から取り扱う官庁は総務省しかない」という人事課課長補佐の言葉に惹かれ、農水省はその「食」を軸としたフィールドの広さと農村振興という政策領域に惹かれ訪問することとしました。

ところが、官庁訪問を進める中で、当初は農村を中心に地域振興を考えていた私の視点が、次第に変化していきました。都市こそが重点的に支えられるべきではないか、言い換えれば、都市をハブとして農村を支えるという従来の構図がもはや通用しなくなるのではないか、という問題意識が芽生えました。その中で、私は次のように考えるようになりました。インフラは、東京から中枢都市、地方都市、そして農村部までを一本につなぐ国家の血管である。物流は、その血管を通して行き来する血液であり、防災はその血液を滞りなく循環させる役割を果たす。**従来の「地方をどう元気にするか」という局所的な視点ではなく、**

「都市と地方を結びつけ、国全体を循環させる仕組みをどう構築するか」という視野に立つことこそ、真の「地方創生」につながると考えるようになりました。そして、その役割を最も包括的に担えるのは、インフラ政策・交通政策・防災政策を横断的に扱う国土交通省であると確信するに至ったのです。そうして、第3クールの初日の訪問先として国土交通省を選ぶことになりました。

官庁訪問に向けた準備(説明会)

上述のように国交省を強く意識するようになったのは官庁訪問を進めていく途中であったため、事前に国交省の開催イベントに積極的に参加していた訳ではありません。そのため、イベント参加がそのまま採用に直結するか、と言えば私見からすると「否」です。他の省庁も同じとは思いますが、**イベント等は、あくまで業務への理解を深め、その省庁の背後にある哲学を吸収する機会**であると捉えた方が良いかと思います。勝手な自己分析ですが、私は他の官庁を見ていく中で形成された哲学が、国交省と親和性の高いものであったため、ご縁をいただけたのだと感じています。

小括

私は、官庁訪問の過程において志望先を大きく転換するという経験をしました。初めに志向していた官庁と、最終的に「ここで働きたい」と確信するに至った官庁は異なります。しかし、まさにこの転換の過程にこそ、官庁訪問が単なる就職活動ではなく、自己の関心や問題意識を不断に照射し直しながら「最も適した場」を探し当てる営みであるという本質が浮かび上がったのだと考えています。

よく言われる「官庁訪問はマッチングである」という言葉に立ち返ってみれば、自分の興味や関心、そして哲学に合致する官庁を見つけられるかが本質であり、その意味では私の経験もまた、多くの体験記と大きく変わるものではありません。もちろん、「マッチする官庁」を探す作業は、訪問が始まる前から徹底的に行うべきです。悩み、迷い、時には立ち止まりながら、それでも最後に心から納得できる官庁に出会うことこそ、訪問の価値であると思います。この冊子を手に取り、ここまで読んでくださった皆様に伝えたいのは一つだけです。——どうか、妥協することなく、自分にふさわしい官庁を探し抜いてください。その過程こそが、きっと皆様の未来を形づくる力になるはずですよ。

末筆ながら皆様が最後に「ここで働きたい」と心から思える官庁に出会い、納得のいく形で官庁探し・就職活動を進められることを、心より願っております。

志望省庁・企業を決めたきっかけ

大学2年の夏ごろ、大学の授業がきっかけでとある省庁（結局官庁訪問では訪問しませんでした）に関心を持ち、イベントに参加するうちに「この省庁で国家公務員として働くのも面白いかも」と思うようになりました。ただ、もともと公務員として働くことへの憧れがあまりなかったこともあり、この段階では縁がなければ民間企業に就職しようと漠然と考えていました。

国交省を意識し始めたのは大学2年の春休みでした。民間就活を始めるタイミングで、当時関心があった省庁などと切り離れた上でどのような企業で働きたいか考えてみたところ、「地方部を含む日本各地で暮らす人々の生活を守り、発展させていく仕事」「そのために、住民の生活に対する影響力と責任を持つ企業」であれば自分は熱意を失うことなく働き続けられるのではないかと思います。その背景として、中高生時代、週末ごとに中山間地域に暮らす祖父母のもとに通い生活の補助をするという日々を送った経験があります。目の前にそびえる山々の美しさや地域に根ざした人々の営みなどの魅力を再確認し、このような地方が次世代まで失われてほしくないと思う一方で、日常生活の制約がより鮮明に見えるようになり、「いざ自分が定住するのは抵抗があるかも」と素直に感じました。こうした自己矛盾と向き合う中で、地方における生活の障壁となる具体的要素を減らすことに真摯に向き合いたいと思うようになりました。

このような思考プロセスを経て、人々の生活や地域のあり方に大きなインパクトを与えるインフラを管理し、各エリアに根ざした事業を行っている通信、鉄道、電力・ガスなどの企業を見ていくうちに、このような分野に対しても、国家公務員として民間企業とは違った角度から関わるができるのではないかと、またそれこそが自分の中にある思いと率直に向き合った結果なのではないかと考え、国交省をはじめ関連する省庁の説明会に参加するようになりました。官庁訪問では、1日目に訪問した総務省（ICT）と非常に迷いました。人や地域をほぼゼロ距離で結ぶ情報通信インフラを支え、利活用を促進することで幅広い地域課題の解決に間接的に関わることができるという理由から志望していましたが、その他に専攻分野にやや関連がある、女性職員の割合が比較的高くロールモデルとなりそうな方に多くお会いできた、といった点で魅力を感じていました。

第3クール1日目の朝を迎えた時点では総務省を訪問しようと考えていましたが、①どの省庁も社会にとって必要不可欠な使命を背負っていることは前提として、国交省が背負う使命の方が自分の大切にしている価値観と近いと感じたこと、②将来地方赴任し自治体や地方支部部局で働く自分を想像したときに、情報通信分野よりも国土交通分野に軸足を置いて働く姿のほうがしっくりきたことなど、最後は直感的な要素を信じて国交省を選びました。

就活全体を振り返って大きな後悔はありませんが、官庁訪問前までに「自分のこれまでとこれからに向き合うこと」にもっと惜しみなく時間を使っていれば、より自信を持って決断をできたのではないかと感じています。就活全般において「自己分析が大切」と頻繁に言われることだと思いますが、特に官庁訪問のようなごく短時間のうちに将来を大きく左右する決断をしなければならない、という特殊な環境ではその重要性を痛感しました。

官庁訪問に向けた準備(説明会)

関西の大学に通っていたため、東京で行われる対面説明会やイベントには金銭的な事情からなかなか参加できませんでしたが、オンラインの説明会や、関西で開催されるイベントには可能な限り参加していました。大学3年の冬以降は、併願していた民間企業の選考も省庁の採用イベントも本格化しスケジュールの調整が難しく感じることもありましたが、この頃には志望省庁が自分の中で絞られてきていたため、イベントの日程が公表され次第最優先でカレンダーに入れ、その合間に民間企業の面接や他省庁の説明会を組み込んでいました。

説明会に参加する際には、回数を参加することが目的になってしまっただけでは本末転倒なので、毎回質問を考えながら聞くようにしていました（月並みですが）。他省庁の採用担当の方から「質問1つとっても、その学生が何に関心を持っているのか、どのような問題意識があるのか伝わってくるよ」と教えていただき、それからは「オンライン参加で気軽にコミュニケーションを取れない分、質問で私がどんな人で、何を考えているのかを知ってもらいたい！」という気持ちで臨んでいました。また、登壇していた方の名前と簡単な感想（プラスの面も、マイナスな面も）の一覧表をExcelで作り、すぐに確認できるようにしていました。官庁訪問中、説明会でお話を聞いたことがある方が原課面接の相手になったことがありましたが、感想をお伝えしたところ話が弾み、自分の興味関心と合致するエピソードを伺うことができました。

K.W.さん

民間企業から国家公務員の道へ

私は新卒では国家公務員ではなく、新聞社に入社し官公庁担当の記者として働きました。学生時代から国家公務員に関心はありましたが、秋試験に落ちてしまい、その後すぐに内定をいただいた新聞社への入社を決めました。当時から「公益のため、広く国民や社会のために働きたい」という思いがあり、公務員でなくても新聞社であればその思いを実現できると考えていました。記者として働く中で、社会に潜む課題を掘り起こし、記事を通して世の中に提起するやりがいは大きなものでした。しかし取材を重ねるうちに、課題解決の最終的な担い手は法律や制度を所管する省庁であり、そこで働く国家公務員であると強く感じるようになりました。民間企業は既存の枠組みの中で対応策を考えますが、公務員は必要に応じて社会の枠組みそのものを変革できます。そこに、民間で働く限界と、公務員の持つ影響力の大きさを実感しました。待遇や給与といった面で民間企業に魅力を感じる人も多いと思います。けれども、一度きりの人生で自分が本当にしたいことは何なのかを考えたとき、私は「社会の仕組みを動かし、未来に影響を与える仕事」に挑戦したいという答えにたどり着きました。新聞業界では、同じテーマを何十人ももの記者が取材しますが、国家公務員が担う政策や制度は一人ひとりが唯一無二の役割を持っています。さらに、国家予算という巨額の資金を動かし、国全体の方向性を形づくるダイナミズムも、公務員という立場でしか得られない魅力だと感じました。民間から公務員への転身を可能にしているのは、国家公務員試験が新卒だけでなく社会人経験者にも門戸を開いているからです。

官庁訪問では、前職での経験を話すことが多く、それが「なぜ公務員か」について説得力をもって説明する材料になりました。社会人経験がある分、話せる事例や視点多く、それは他の受験者にはない強みだと感じています。就職や転職は、人生の方向を大きく左右する節目です。だからこそ、公務員か民間かという枠にとらわれず、自分が心から望む働き方や役割に真摯に向き合っほしいと思います。その選択の先にこそ、自分らしいキャリアと納得のいく人生があると信じています。

志望動機の検討

私の志望動機は、大きく分けて「平和で安心して暮らせる社会」と「誰もが環境に関わらず挑戦できる社会」という二つを実現することでした。

大学では政治学を専攻し、授業を通じて安全保障や民主主義への関心を深めました。世界のある地域では平和が当たり前ではなく、汚職が蔓延し、国に希望を持ってない人々がいる現実を学びました。

そうした状況を知る中で、私が当たり前に享受してきた平和をこの国で持続させたいと強く思うようになりました。安全保障や民主主義といった分野は民間企業では直接実現が難しいため、早くから公務員の仕事に関心を抱き、当初は防衛省や警察庁を志望していました。しかし、各省庁の説明会や、改めて人生を振り返ってみた結果、日本が抱える課題や将来の方向性を改めて考えるうちに、「日本を守る」という視点に加えて、「地域社会や経済を活性化することにも携わりたい」という思いが強まっていきました。その背景には、父の実家がある地方での経験があります。長期休暇には毎年帰省し、父に街を案内してもらっていましたが、年を追うごとに空き家やシャッター街が増え、地方が少しずつ衰退していく様子を肌で感じてきました。この現実には、地域の暮らしと経済を支える政策の必要性を強く意識させ、志望の幅を広げるきっかけとなりました。最終的に、こうした思いを最も具体的に形にできるのは国土交通省だと考えるようになりました。国土交通省は、インフラ整備や地域活性化、災害対策、海上警備などを通じて、安全・安心な生活基盤の確保と、地域の未来を支える環境づくりを担っています。私が大切にしてきた「平和で安心して暮らせる社会」と「誰もが挑戦できる社会」の双方を実現できる場所だと確信し、志望しました。

志望省庁を決めたきっかけ

国土交通省を志望した理由は、「平和で安心して暮らせる社会」と「誰もが環境に関わらず挑戦できる社会づくり」という自分の軸を最も実現できると考えたからです。元々は安全保障に関心があり、警察庁や防衛省の説明会に参加していました。しかし、両省庁は究極的な役割が「治安維持」と「国防」に限定されており、平時・有事を問わず社会を支えるためには、これらに加えて物流やインフラといった基幹領域をどう持続させ、確保していくかが欠かせないと考えようになりました。また、厚生労働省や経済産業省も検討しましたが、厚労省は社会保障や労働政策に強みがある一方、私に関心をもつ安全保障との接点は限定的でした。経産省は産業競争力の強化に魅力を感じつつも、社会の安全基盤そのものを守るという観点では関与範囲がやや狭いと感じました。こうして比較を進める中で、港湾や物流といった重要インフラ、さらには海上での警察活動を担う海上保安庁を所管する国土交通省こそ、自分の思いを安全保障と地域活性の両面から実現できる場だと確信しました。国土交通省には春までに1、2回、直前期にも説明会に参加した程度でした。参加回数は多くありませんでしたが、そこで聞いた一つひとつの話が非常に興味深く、自分の関心と合致していると感じたことも、最終的に訪問を決めた理由の1つです。

むぎさん

民間企業と併願したのか、公務員専願だったのか

民間企業との併願で就職活動を行っていました。他省庁については環境省、公正取引委員会を、民間はとにかく幅広く見ていました。メディアや証券、メーカー、園芸、出版などなど。とにかく可能性を広く持っておきたいという思いがあったからです。また、「自分が大切だと思ふモノを守りたい」という大雑把な就活軸を掲げていたため、今までの人生の中で自分が好きだと思ふモノ・コトを書き出してそれに関する職種や業種について片っ端から見るといふ就活を行っていました。

民間就活をしていてよかったと思ふことは、興味関心を広げることができたこと、自分の価値基準の明確化ができたことです。民間就活で伺った業界のお話が官庁訪問に活きたり、自分の関心の優劣を確認できたり。また、民間就活で様々な働き方や職員の方の雰囲気を見たからこそ「どういった職場で働きたいのか」というイメージがより明瞭になったように感じます。

何より目移りしやすい自分の場合、幅広く就職活動を行ったからこそ「多くの可能性の中のただ一つ」という自分への説得力が就職への納得感に繋がりました。

志望動機の検討

就職活動に際し、自分の守りたいものは何かを深く考えた際、最たるものが「人々の暮らし」でした。日本への愛着心から大学では文学部に所属し、古典を専攻していたため文化に直接携わることができる行政法人や学芸員なども頭をよぎりました。しかし、自分が文学や芸術、歴史のどのような部分を愛しているのか再考した際、表出されたもの以上にそれらから溢れる人々の生活そのものを自分は愛おしく感じるのだと再認識し、私が向き合いたいのは文化全般の土壌となる「暮らし」それ自体であると考えました。

しかしながら「暮らしの保全」というのは働きかけ方が異なるだけで民間企業、他省庁においても実現できる広い目標です。そんな中、ツールや手法等比較検討し国土交通省への熱意が最終的に固まったのは官庁訪問を通してでした。

官庁訪問中、自分は国土交通省以外に環境省、公正取引委員会を訪問していました。環境省については自身が「豊かさ」の重要なパーツであると思ふ自然環境の保護と、環境と紐付けした地域の付加価値化に関心を抱いたことが志望動機でした。

公正取引委員会に関しては、「暮らしの豊かさ」について自分の視野を広げようと思ひ、業界問わず「市場」に対して働きかけをし、消費者の選択の自由を担保するという業務内容に関心を抱いたことがきっかけで志望しました。三省庁を比較した上で、業界への働きかけの深度、省内の所管分野の関わり合い方、政策についての時間的視点（スパンや問題の表層化の時点）等、本当に色が異なると実感し、その上で国土交通省に魅力を感じる理由が自分の中で明確化されていきました。

官庁訪問に向けた準備(説明会)

志望を固めるのが遅かったことから4月以降のオンラインの説明会のみ参加して官庁訪問に臨みました。インターンやイベントへ行けなかった身として、**情報収集面でも、人事の方や同じ省庁への志望者との交流作りという面でも、参加できるならするに越したことはないだろうと思ひます。**ただ自分の場合、逆に情報量が少なかったが故に、官庁訪問前のオンライン説明会で職員の方がおっしゃっていた「官庁訪問で現場職員に話を聞いて学ぶという機会は中々得られるものではないから楽しんで」という言葉をそのまま胸に、**気負いすぎることなく官庁訪問を楽しめたのかなと感じています。**したがって**もしイベントに参加できていなかったとしても気落ちし過ぎず、刺激に対して貪欲に自然体のまま官庁訪問期間を楽しんで欲しいなと思ひます。**

たこさん

民間企業と併願したのか、公務員専願だったのか

民間併願は就活を開始した当時（2024年2月頃）から決めていました。両立の理想的なスケジュールは、試験対策のウェイトが高くない夏インターンの選考から重点的に対策を行い、本選考優遇や早期内定を早めに確保し、秋試験や春試験、官庁訪問などの公務員就活の対策にシフトする、という形がベストだと思います。

併願の理由の1番は公務員試験や官庁訪問などに落ちた際のリスクヘッジです。特に自分の大学から国家総合職として採用された人が少なく、自分という存在が省庁にどこまで通用するのか当時はわからなかったことが大きな要因です。

併願をすること自体のメリットは2点あると思います。1点目は就活において必要な面接やESなどのスキルに慣れること、2点目は志望動機作成時の視野を広めることができることだと思います。前者に関しては官庁訪問においても調書などを書く際のスキルや基礎的な面接力は求められるため、民間就活において使っていた一定のスキルは生かされたと思います。後者では志望する領域の理解を深めることができたと思います。特に民間事業者が進める事業では公共性の高い事業に参画したいという思いがあり、それらの事業を進める上で行政も絡んでくることから、国交省などステークホルダーの多い省庁の志望動機を考える際も、事業者目線というミクロな視点での政策分析をすることができたと思います。

就活軸の検討

就職活動の軸は①社会に対して幅広く多角的にアプローチできる事業に携わりたい、②地域住民の生活の基盤を支えたい、の2点であると考え、鉄道・物流・IT・デベロッパ・ガスなどの業界を主に見ていました。民間企業と公務員において関連しているものは何点かあると思います。①においては、民間事業者の多角的な事業やインパクトの大きさを考えると、直接的、間接的に社会に与える影響は民間事業者にあると思いますし、省庁は社会の制度設計を担う立場として日本全体の社会に与える影響が大きいことから、その事業に携わるやりがいを感じられると思っていました。②においては、事業者が社会の根幹を支えることで、地域に住む人たち全員の生活を支えることに繋がり、そこにやりがいを感じられると考えていました。

志望動機の検討

公務員・民間両方で共通して言える検討プロセスとしては、過去の自分や今の暮らしにおけるその企業や行政との接点（いわゆる原体験）の分析から、自分が社会に提供したい価値は何か、どうキャリアステップを踏んでいきたいのかを考えることがメインであり、その中で必要であればその職務を遂行する上で必要なスキルや思考力を調べ、過去の自分の経験を活かすことができそうなもの（自己PR）をマッチングさせていました。

大学の専攻が志望動機に影響したとは特段考えませんでした。一方で、自分が大学で学んだ知識やそこで得た視点を活用可能な場面を積極的に探し、時に企業などにアピールすることもしていました。苦勞した点としては民間の原体験の分析です。特にB to Bの事業者の原体験を含めるのが最初は難しかったですが、その企業における事業のエンドユーザーまでを意識していました。公務員就活では特に原体験を言語化することは大事という気付きを得ました。whyを繰り返していくとその先には自分の過去の経験との接点が必要であると思います。実践としてはその省庁が所掌する政策によってどう影響を受けたかを分析していました！

志望省庁・企業を決めたきっかけ

前述の就活軸に合致した中で、最終的に受けたのは民間5社と国土交通省、厚生労働省でした。国家公務員を目指した当初は地方創生という漠然とした目標を基に様々な企業を見ており、その中の一つに国土交通省が出てきました。そして夏インターンに参加した際に、自らの知識があまりない政策の立案ワークを体験した時の楽しさや面白さ、またそこでの職員の人柄等に惹かれたのが国交省を見始めたきっかけです。国交省を志望した理由としては父が技術系公務員として地域を支えていることからインフラの行政の在り方に一定の理解があった点と小学生のころに被災しその現場を見たうえで地域の防災減災政策に興味関心を持った点です。そして、就職活動において自らが社会に見出したい価値は、「社会全体に対して多角的かつ影響力の大きい事業に参画し、特に地域住民の生活基盤を支えられる事業に取り組みたい」という思いは強く、災害の多い日本全土に対して防災減災政策に取り組むことができるのは国交省しかないという思いから志望しました。

企業を受ける際は、ハード・ソフト両面から沿線地域に価値提供できる鉄道業界、地域の生活基盤を支える物流業界、先端技術によって行政サービスの改善を担うことのできるIT業界、事業の多角化を通じて地域の生活基盤を根本から支えるガス業界を選びました。また、地方の医療制度の改善に取り組み地域の基幹産業を維持したいという思いで厚生労働省を併願しました。

一方でこれらを選ばず国交省に決めた理由は、民間企業でなかなか目標達成できない地方創生に取り組める点、そして国家公務員を目指した真の原体験は何かを振り返り、激甚化する災害に対して行政が防災減災政策に取り組むことで日本のあらゆる地域の命を救いたいという思いからでした。

#春試験#国家公務員専願#1日目

#国土交通省専願#休学#起業

financierさん

はじめに

就職活動、おつかれさまです。

就活体験記では、「これが知りたかった」といった情報を書けたらいいね〜という話だった気がするので、他の同期とあまり被らないような情報を書いていけたらと思います。

就活の概要

東京大学法学部第3類（政治コース）で行政学を専攻しつつ、社会基盤システムの部分的な研究にも少し携わっていました。

3年生の春試験（政治・国際・人文区分）→休学→国土交通省専願（全クール1日目）という流れで内々定を得ました。

就職活動としては、民間企業の方はzoomの合同説明会を聞く等に留めてました。また、省庁の方は気になった3省庁の説明会を1回ずつ聞きに行っただけです。民間は「社会に貢献する」といったようなビジョンと「お金を稼がなきゃならない」という至上命題が併存せざるを得ないところが、自分にとっては性に合わず、かといって気になっていた官庁も「郷に従え」感が強くそれはそれで性に合わないなあと感じてしまいました。仕事内容も働いている方もカルチャーもいいなあと思ったのが国土交通省だけだったので、それ以外は受けないことにし、落ちた場合はそのタイミングでまた考えることにしました。

官庁訪問の感触

官庁訪問の準備は、あまり作り込みすぎることにはしませんでした。無鉄砲に思えるかもしれませんが（し、実際自分の会社-後述-のことで精一杯で時間が取れなかったのです）が、意外とメリットがあります。

10分ほどでESを書き上げたことで、面接で聞かれたときに、頭で考えなくてもスラスラと答えられる内容になり、企画官面接で何を聞かれても普通に（作り込みっぽくなく）答えられる人みたいになっていたように思います。作り込みすぎると、面接官の質問に答える際に「あれ、ESに何て書いたっけ…」となってしまう可能性があり、このぎこちなさや焦りはマイナス印象に繋がりがねないので、あまりオススメしません。「大学までの勉強や興味分野を楽しみつつしっかりやっておくこと」が何よりも大事そうです。付け焼刃の対策ではなく、これまでの自分自身が培ってきたものを素直に表現することが、国土交通省を含め、行きたい、または自分に合う組織で働ける一番の近道のように思います。

p.s. 人事面接では、割と雑談してた記憶がなくはないです。総じて楽しかったです。



休学・起業というまわり道について

私の就職活動は、休学と起業というユニークな経験によっても支えられました。

大学4年生の6月というタイミングで休学を決意したのは、このまま社会人になるには人間としてまだ成長している気がしなかったからです。ゆっくりと自分と向き合い、将来のあり方を考える時間が必要でした。休学中には旅行に行ったり、地域公共交通政策や経営学、プログラミング、圏論、統計力学など、興味のある分野を幅広く学んだり、悠々自適な生活を送りました。少し時間に余裕ができたので、総合旅行業務取扱管理者や気象予報士などの国土交通省に関わる資格勉強にも挑戦しています。

また、休学期間中に機会があり起業も経験しました。事業内容は、企業や自治体と学生を繋ぎ、長期休みなどを利用して何かを考案し実行する「事業創出」です。起業の動機は「まちづくり」の性質にあります。国でしかできないことが多いように、鉄道会社や店舗運営など、民間だからこそできることもまちづくりの分野では多い…国土交通省が事業者を支える立場だからこそ、一度支えられる側の気持ちを理解してみたかったです。起業を経験したことで、少しではありますが、事業を「支える側」である国の仕事の役割を、事業を「支えられる側」の視点から理解することができました。また、自分の人生の軸である「やりたいことをやって生きていける人生」「生き活きとできる選択肢を切り開ける人生」を、より多くの人々が歩めるような仕事をしたいという思いを再確認できました。

就職活動中は何かと焦りがちですが、立ち止まって自分と向き合う時間も大切だったのかもしれない。

国交省を専断することについて

オススメしません。社会人になりたい人は特に。僕の場合は「自分に、また自分のやりたいことにしっかり合う生き方をする」というのが一番の命題だったので、社会に出遅れるのはそこまで問題視していませんでした。ただ、それが一般的な価値観でないことも認識はしており、社会に出ることを目標とする場合は本当にオススメしないです。実際、民間就活せずに財務省にいったゼミ同期は「どうしよう、私内定持ってないまま…」と官庁訪問に焦りを隠せない様子だったので、社会に出ることを至上命題とするなら併願はしておくべきでしょう。まあ何でもかんでも受けるというよりかは、自分が本当に行きたいと思ったところを数社受ければ大丈夫でしょうという気持ちはなくもないです。**周りに流されず、自分に合った就活ライフを送ってください！**

おわりに

みなさんが、就職・院進・起業・放浪など、あらゆる選択肢の中から自分に最も合うものを選び、または新しい選択肢を切り開くことによって、**満足できる人生を送れることを祈るばかりです。**

その上で、もし国土交通省にご縁がありましたら、ぜひ一緒に頑張りましょう！



UTさん

民間企業と併願したのか、公務員専願だったのか

大学3年生の夏～冬にかけては、公務員だけではなく、

運輸系(鉄道)やデベロッパ、総合商社など**自分の興味関心分野を中心に幅広く民間企業も見よう**にしてみました。というのも、小さい頃から漠然と国家公務員として社会を動かすような大きな仕事をしたいと思ってはいましたが、就職活動をしていく中で、必ずしも国家公務員でなくても社会に影響を与えるようなダイナミックな仕事ができるなと感じたからです。

そのような経緯で始めた民間就活でしたが、**自分が働く上で大事にしたい価値観が明確になった**という点で民間企業を見て良かったと思います。正直就活を始めた時の時期(大学3年生の春)は、一種の憧れのようなものから省庁を見始めて「なぜ国家公務員でなければいけないのか」がぼんやりとしていました。ただ、様々な民間企業の説明会やインターンに参加し、社員の方のお話も伺う中で、どの会社の社員さんも「第一は自社の利益を最大化し、その副次的な効果として社会に対して良い影響を与えられたらいい」というスタンスで自分の仕事と社会との関わりを捉えているなと感じました。もちろん民間企業なので自社の営利を追求する形で仕事に取り組むのは当然のことです。しかし私はそれを受けて、**自分自身は何のしがらみも受けずに社会に向き合い、純粋にそこで暮らす人々のために仕事がしたい**と思い、**そのような価値観を持って働き続けられるのは国家公務員しかない**と確信することができました。

このことから結局民間企業には1社しかESを出しませんでした。自分がなぜこの業界でなければいけないのかを客観的に考え、納得して進路を決めることができたという点で民間企業を見て良かったと感じています。

留年を経て感じたこと

実は私は2度官庁訪問を経験しています。

1度目は、地方部やそこに住む方々のために国家公務員として働きたいという想いから、地方部に対して、人の移動や生活基盤という点でアプローチを取ることができる国土交通省、人々の生活を根本から支える行政サービスからアプローチできる総務省(自治分野)、そして多くの地方部における主産業である第一次産業からアプローチできる農林水産省の3つの省で迷いました。最終的には、**職員さんの雰囲気や自分の興味関心から国土交通省で働きたい**と感じ、(続く)

官庁訪問の末に国土交通省から内定をいただきました。すっかり迷って決めた進路だったので後悔は全くありませんでしたが、その一方で、世の中特に地方部において、**さまざまな政策分野に跨る課題(交通、産業、教育、福祉など)**が山積する中で、**自分の扱うことのできる業務の範囲が国土交通分野に閉じてしまうことについて一抹の不安を抱え**続けていました。

そんな中で私は留年をしてしまい、もう一度官庁訪問をすることとなりました。上で述べたような悩みを抱えていたこともあり、国土交通省の他に財政という視点から分野横断的に政策課題に取り組むことのできる財務省、地方行財政の視点から同じく幅広く社会に向き合うことのできる総務省(自治分野)を積極的に見に行くようになりました。

財務省や総務省で何うお話は非常に面白く、また国際金融市場や統治機構のあり方を見据えながら国の在り方を議論する職員さんの姿は、自分のありたい姿に近くとても魅力的でした。その一方で、**自分がこの先30、40年どの分野に軸足を置いて日本の将来のために働きたいかを考えた時に**、私自身は財政のプロや地方行財政のプロとしてではなく、やはり国土交通分野のプロ、特にまちづくりや人の移動に関わり続けられる環境で仕事をしたいと感じました。

また、制度官庁と言われる2つの省を知るうちに、**国土交通省の所掌分野も決して閉じている訳ではなく、住宅やまち、移動など空間にアプローチできるので、他の政策分野がうまく機能するための土台を作ると**いう点で**幅広く社会課題に向き合うことができる**と感じました。すなわち、**社会に現れる分野横断的な課題に対して、その課題を解決するための財政基盤を提供するのが財務省、行政基盤を提供するのが総務省(自治分野)**だとすれば、**国土交通省は空間的基盤を提供するものである**という考えに至ったという訳です。

このような経緯から、自分が長い職員人生の中でずっと関わっていきたいもの、そしてそれに関わることで社会課題に対して地に足を付けながらも幅広くアプローチできるのは国土交通省だと確信したため、2度目の官庁訪問でも国土交通省を志望し、内定をいただいた次第であります。



3 官庁訪問を 乗り越えるために！



1. 【特別企画】インタビュー・・・ pp.52~57

採用担当者×リクルーター×内定者

お二人について・・・ pp.52~54

活躍している職員の特徴・・・ p.54

官庁訪問の振り返り・・・ pp.55~56

27卒へのアドバイス・・・ pp.56~57

2. 官庁訪問エピソード集・・・ pp.58~59

採用担当者 × リクルーター × 内定者

田中紫穂さん

2020年入省（経済区分）／2025年度官庁訪問リクルーター

【経歴】

都市局・市街地整備課で渋谷や札幌の再開発、福島復興区画整理を担当。総合政策局・情報政策課ではDXを推進し、申請手続きのオンライン化やワンストップ化、デジタル人材の配置を進めた。国交省の留学制度でロンドンの大学に一年間留学。帰国後は国際政策課でインフラ海外展開を担当し、アジア・アフリカで企業と現地政府をつなぐ役割を担った。



高橋直暉さん

2017年入省（経済区分）／総合職事務系採用担当

【経歴】

住宅局で法律改正プロジェクトや災害対応に携わる。航空局では羽田空港・成田空港の機能強化（飛行経路見直しや滑走路増設による容量拡大）を推進。不動産・建設経済局では、建設業界の賃上げや働き方改革を制度改革に落とし込んだ。内閣府出向を経て、昨年度（2024年）より人事課で採用担当。

高橋さん

「建設業界の制度改革では、“現場の声をどう制度に反映させるか”という行政の難しさを、身をもって感じました」

田中さん

「留学で都市データ分析を学び、マクロ・ミクロ双方の視点から政策を捉える大切さを実感しました」

お二人について

印象に残っているお仕事について、詳しく教えてください。

高橋：住宅局で経験した大阪北部地震（2018年）の対応です。当時は入省してすぐの頃で、前面に立って動く立場ではありませんでしたが、現場で塀が倒れて人が亡くなるという痛ましい出来事がありました。自分たちがルールとして整備していたにもかかわらず、それが守られずに命が奪われた—この事実は強い衝撃でした。

この経験から、「制度を作るだけでは不十分だ」ということを実感しました。現場の人にきちんと理解してもらい、意識を高め、遵守してもらうところまで含めて取り組まなければ、制度は生きない。実行と定着はセットで進める必要があるという教訓を、若いうちから肌で感じました。

自分の関わった分野で人命が失われることは、どんな組織でもそう多くはないはずですが、国交省ならではの責任の重さと、政策の現場で起こる現実を学んだ出来事だったと思います。また、政府全体で行われた高いレベルの議論に立ち会えたことは貴重でした。

田中：総合政策局・国際政策課で、セネガル、コートジボワール、ケニア、タンザニアなど、なかなか訪れることが難しい国々でインフラ海外展開のプロジェクトに携わった経験です。

印象的だったのは、実際にアフリカに赴き、現地政府からの建設ニーズを聞き取った時のこと。アフリカでは、公共交通も限られているため交通量（特に自動車やバイク量）が非常に多く、現在も道路等のインフラ需要が高いです。現地政府のニーズと本邦企業が保有する技術をマッチングさせるため、官民インフラ会議をセッティングしました。真っさらな土地から将来のインフラを思い描き、現地のニーズに応える形で話を進めた一連の経験は、自分の中で強く印象に残っています。

普段、働く際に大事にしていることは何ですか？

高橋：心がけているのは「想像力を働かせること」です。行政官として日本全体、時には世界全体を相手に仕事をする中で、すべての現場を見に行ったり、全員から直接話を聞くことはできません。限られた時間や環境の中で、政策の対象となる人や物事についてどれだけイメージを膨らませられるか。それが仕事の質を大きく左右すると

思っています。
例えば、建物の基準を作るときも、実際の建物は千差万別です。その中で、共通して適用でき、誰もが守れる基準を考えるには想像力が欠かせません。航空局で羽田空港の機能強化に伴う地域調整をしていた時も同じでした。高齢者や子育て中の家庭、ビジネスマンなど、立場ごとに、騒音問題に関心があるのか、安全性に懸念があるのか、あるいは取組を歓迎してくれているのかなど、事情が異なります。

すべてを網羅するのは難しいですが、「こういうことで困る人がいるかもしれない」「こんな影響を受ける人がいるかもしれない」と一つ一つ想像し、可能な限り配慮する。それが幅広い国民を対象とする公務員の責務だと思います。だからこそ、一緒に働く仲間にも「見える範囲だけで判断せず、想像力を働かせてほしい」と常に伝えています。

お仕事を通じて身についた力はなんですか？

田中：「物事を俯瞰的に見る力」です。日々の業務は、例えば名簿作成等細かい作業も多いのですが、その中でも「この作業は何のために必要なのか」「どんなスケジュール感で進めるべきなのか」「誰のために作っているのか」といった視点を、1年目の頃と比べてもより一層持てるようになりました。

これからも磨いていきたいと思っていますし、こうした視点は、背景を理解し、ニーズに応える政策を立案するための土台になるもの。まさに今、自分の中で育ち始めている力だと感じます。

高橋：私の場合は、「相手が欲しい情報を端的に伝える力」です。役所では忙しい相手に短時間で説明しなければならない場面が非常に多く、自然と鍛えられます。

例えば1年目の頃、事務次官に法令改正の説明を一人で任されたことがありました。数分しかないアポの中で、何十ページもある内容をどうまとめるか。「どこを省き、どこを重点的に説明するか」を瞬時に判断し、簡潔に必要性とポイントを伝える練習が繰り返されます。

これは省内だけでなく、省外でも同じです。先ほどお話しした想像力と掛け合わせて、相手の立場や関心に応じて説明の角度を変える。このスキルは、若いうちからの場数によって自然と身についてくると感じています。

「若手の裁量権」を感じたエピソードはありますか？

高橋：1年目の電話対応から、裁量権の大きさを強く感じてきました。着任したばかりで右も左も分からない状態でも、外から見れば私は立派な国交省の職員。電話一本でも、自分の発言が「国の見解」として受け止められます。実際、「あのときあなたはこう言いましたよね」と後から確認されることもあり、その責任の重さを実感しました。係長・課長補佐クラスになると、講演やプレゼンの機会も増えます。国会議員の前で説明することもあり、その場では国交省としての見解を自分の言葉で語るなければなりません。中身はチームで作上げたものでも、発信するのは自分。その一言一言に、裁量権の大きさと責任を感じます。

田中：私は国際政策課にいたとき、裁量権の大きさを感じました。国際会議や先方政府との調整を任されることも多くありました。もちろん大枠や方針はチームで決めますが、先方から「どのクラスの方が出席すればいいですか？」と聞かれれば、「このクラスでお願いします」と私が直接答える場面もあります。その一言で、会議の枠組みや参加者の顔ぶれが決まっていきます。

民間企業ではなかなか経験できない「国同士のやり取り」を、自分の判断で進められる——そんな場面が、国交省では若手にも与えられています。これは、若いうちから感じられる裁量の大きさの一つだと思います。

お二人が国交省で好きなところはどこですか？

高橋：一番の魅力は「人」です。正直なところ、役所の仕事は楽なことばかりではありません。体力的にきつい時があれば、人命に関わるような緊張感のある場面、関係者との調整で頭を悩ませることもあります。そんな中でも、国交省では一人で抱え込むことはほとんどなく、必ずチームで動きます。そして、そのチームの中には「助け合おう」という意識を持った人が本当に多いと感じます。

人柄だけでなく、バックグラウンドも多様です。法学部出身だけでなく、理系の専門を持つ人、自治体や民間企業から来ている人、現場での実務経験が豊富な人など、経歴も知識も幅広いメンバーが集まっています。それぞれが持つ経験や視点を生かし合いながら、課題に向き合える。この環境は国交省ならではの思いです。

田中：高橋さんに「人」を先に言われてしまったのですが（笑）、私もずっと同じことを思っていました。でももう一つ挙げるとすれば、「若いうちから色々なことに挑戦できる点」だと思います。私自身、若いうちから本当に色々な経験を積ませていただきました。

私の場合は、留学の機会もいただき、「デジタルに関心がある」と話したら、実際にデジタル分野を経験させてもらえたりしました。幅広い分野の中でも、人それぞれ自分の軸やキャリアの方向性があると思うのですが、その軸を大事にしながら、多様な分野に関わる経験を若いうちから積ませてもらえる。そこが国交省のすごくいいところだと思います。

なぜ留学に？——都市とデジタルをつなぐ視点を求めて

田中さんは、入省直後の都市局での経験、入省3年目の総合政策局・情報政策課での経験から、まちづくりの意思決定に、積極的に定量的な視点を取り入れたいと思うようになりました。「データを使えば、より客観的な根拠をもとに政策判断できるのではないか」——。こうした思いから、都市とデジタルを掛け合わせた学びを求め、国交省の制度を利用してイギリス・ロンドンに1年間留学しました。

留学中は都市データ分析を中心に学び、自分でも実際に分析を行いました。帰国後は国際政策課でインフラ海外展開を担当しました。スマートシティ技術を海外に展開する際にその経験が大いに活かしたといいます。例えば、内水氾濫防止のための水圧データ収集の技術展開の場面では、技術者の説明を理解するだけでなく、改善案等を提示できたのは、留学で培った視点とスキルがあったからでした。



活躍している職員の特徴

近年、労働市場の流動化に伴う中途入省の方も増えていると思います。新卒で国交省を選ぶメリットを教えてください。

高橋：若いうちから国交省でいろいろな経験を積むことで、現場感覚が養われたり自分の視野が広がったりというのはあると思います。役職が上がっていくと忙しくなって、リアルな政策現場を見る機会が限られてきてしまいますからね。ちなみに中途入省の方は民間で培ったデジタル技術や語学力などのスキルを活かして働いていると感じています。両者が補完しあって活躍していると思いますね。

いろいろな職員の方がいる中で、活躍している職員の特徴があれば教えてください。

高橋：「シンプルに楽しめる人」だと思います。忙しい部署にいても、ニコニコしながら楽しそうにやってる人はやはりすごいなと感じます。特に課長補佐になると、課の中心として雰囲気を作らないといけない。もうどんなに仕事が舞い込んできても楽しそうに仕事するという人の方が働いてても気分いいですね。

田中：確かに、いつもニコニコしている方に対しては「この人についていけば、何かあっても大丈夫だろうな」、と思いますよね。しかも、そういった方々は柔軟で相手の気持ちを尊重できる人が多い気がします。

官庁訪問を通じて、「好きなことを仕事にされてる方」が情熱を持って働かれている印象を受けました。そういう方はどれくらいいるんでしょうか？

高橋：好きなものを仕事にしている人も、自分が携わったことで好きになるという人も多いと思います。僕は元々〇〇が好きとかっていうのはなかったんですが、航空局で管制官や航空会社から来ている人と一緒に仕事する中で、航空の世界って奥深いなと感じたのはすごくいい経験として説明会などでも話しています。こんな風に、実際携わってみてその分野を好きになった人は結構いるんじゃないかなと思います。

学生の時点で求められるスキルといったものはあるんでしょうか。

高橋：シンプルに柔軟性だと思います。どんな分野でも面白いと思って飛び込んで楽しめるか。僕らも日々仕事をしていて、「無批判に前例踏襲するのはやめよう」とよく言っています。自分の頭で考えて、新しい時代に沿うような発想で政策を作っていこうよっていう柔軟性が求められるんじゃないかなと思いますね。（続く）

高橋：内々定を得た学生は、短い時間の中でも「しっかりと柔軟性があるな」というのを組織として判断したメンバーなので、ぜひそういったところを活かして仕事してほしいと思います。

官庁訪問の振り返り

ここからは、官庁訪問について伺いたいと思います。官庁訪問時に田中さんがリクルーターを担当していた内定者に来てもらいました。

内定者：よろしくお願ひします。田中さんから見て、官庁訪問を通じて自分が成長したところがありましたか？

田中：最初と最後で印象が変わりました。基本軸は一緒だと思いますが、アウトプットがどんどん上手くなっていったなど。

高橋：原課訪問で鍛えられたんじゃない？（笑）

一同：（笑）

内定者：原課訪問は楽しかったです。始まる前、官庁訪問の初日は本当に不安でした…

田中さん目線で、初日はどのように見ていましたか？

田中：初日は誰もが不安ですよ。ただ、印象としては、結構自信を持って喋っていたなど。不安でも「自分の言いたい事をちゃんと伝えるんだ」という意味があれば、リクルーターにもしっかりと伝わると思います。

内定者：ありがとうございます。その他に感じた印象はありますか？

田中：第一印象は本当に明るいなど。また、原課訪問に行ってから成長がすごかったです。原課訪問後、「自分の中で話を落とし込んで、こういうことをやりたいと思いました」「これも聞きたいと思いました」と言っていたきました。リクルーターとしても話を聞いてもらってよかったなど思いましたし、もっといろんな方のお話を聞いていただきたいとも思いました。

内定者：そう言っていただけると嬉しいです。会うたび会うたび田中さんの反応が違って、明るくなってた印象があるんですが…

田中：はじめは不安そうにしていたので少し合わせていました笑。ただ、元々明るい方だなというのは話して感じていたので。

内定者：そんなところまで考えるんですね。リクルーターとして、他にどのようなところが大変でしたか？

田中：官庁訪問で初めて会う学生に対して、20分くらいの会話の中で、どういった人柄なのか、何に興味を持たれているのか把握するのは難しかったですね。

内定者：一番最初に「同じ大学だよ」と言っていたら、それがすごくありがたかったです。

田中：共通点などを通して、リクルーター自身も自己開示することで安心してほしいなどは思っていて、その点は意識したかもしれないです。

官庁訪問を経て、内定者はどんな特徴があると感じていますか？

高橋：個性が豊かだということなのかな。もう本当にそれに尽きると思う。皆さん個性が立っていますが（笑）、決して主張しすぎることもなく、周囲ともよい関係を築けそうな人が多いかなと。あと、皆さんの公務や国土交通省への熱意には私自身、圧倒されていました。

出身や属性、何日目の訪問かというのは影響していましたか？

高橋：出身や属性は影響しないですね。データ化されてると思いますが、今年の内々定者の皆さんは出身地や大学、専攻も多様です。訪問日については、志望順で回るべきと私自身考えていて、早く回ってくればそれだけ私たちに熱意も伝わりますが、結果として、3日目訪問の方でも最後は立派に内々定を勝ち取っていききましたね。官庁訪問ってすごく特殊な環境で、いろんな省庁のいろんな人に会って、感情の変化や魅力の発見、「違うな」と思うことがすごくある中で、他の省を深く知った上で国交省に決めてくれるというのは、すごく良いことかなと思います。

高橋さん目線で官庁訪問はいかがでしたか。

高橋：正直なところ、私も大村係長(高橋さんと同じく昨年度の採用担当)も物凄い負荷がかかっていましたが、普段ラフに話していた学生さんがしっかりと自分の中で志望動機などを仕上げた当日ぶつけてくれて、「〇〇さんって本気を出せばこんな感じなんだな」という良いギャップを知ることができたのは面白かったです。もちろん初めましての学生さんも沢山知ることができたのも楽しかったです。やはり採用活動・官庁訪問は学生の皆さん一人ひとりの人生に向き合うことなんだと実感しました。それから、自分たちが普段発信している魅力だけではなく、学生の皆さんが就職活動で様々な企業・省庁を見る中で浮かび上がってきた国土交通省の魅力や、職員との会話を通じて感じたことなどを教えてくれるので、様々な角度から国交省という組織を改めて見つめ直す良い機会になったかなとも感じます。

官庁訪問で学生に求めていることがあれば教えてください。

高橋：皆さん念入りに準備をしてくると思いますが、面接する立場すると「この返し練習してきたな」というのが分かるんですね。(笑)お互い緊張はしていると思うのですが、その中で人柄や全体的な雰囲気を見ながら判断したいので、リラックスして面接に臨んでほしいと思いますし、言葉に思いや熱意を乗せて伝えてほしいなと思います。

田中：無数にある職業の中で、国交省を選択する理由を準備することは必要だと思います。それは例えば業界研究や、自身の今までの経験や思いを深掘りする中で得られるのかと思います。ただ、それらをアウトプットするときに、型にはまった回答ではなく自然なコミュニケーションとして伝えてくれればありがたいですね。

高橋：あと、原課訪問でこういう話を聞いて、ここが面白かったですというのを語ってくれる学生は僕も嬉しかったですね。職員を手配するリクレーターにとっても嬉しいことですし。「すごく面白かったです。ワクワクしました」みたいな言葉でいいので、リアルな感情をしっかりと伝えてくれると、「この学生は職員の話聞いて心から楽しそうだからマッチしてるんだろうな」と言ったのがわかるから、原課訪問でどう感じたかは、都度の面接のタイミングで披露してほしいなという風に思います。

27卒へのアドバイス

採用担当として考えていることはありますか？

高橋：官庁訪問に来てくれる人はみんな良いものを持っていると思います。でも結局は面接なので、うまく表現できず損してしまう学生もたくさん見えました。就職活動や官庁訪問での原課訪問などで自身を成長させて、自分の思いや考えをしっかりと言葉にできるようになってほしいなと。

そういったところだと、「民間就活やったらいいよ」みたいな話をしたことがあります。アウトプットを上達させる場数を踏めまっし、就職活動を通じた交流も生まれると思うので。多くの人と会話する中で、「自分のことや思いを伝える」ことが自然とできるようにもなってくると思います。

田中さんは、学生のどんなところに注目したい？

田中：個人的には、人柄を知りたいですね。もちろん知識や実務能力も必要ですが、これらは入省後に伸ばすことができると思うので、チームとどのように仕事をしていくのか、相手の立場に立って物事を考えられるか、といった点に興味があります。

学生たちにどういう風に接してほしい、というのはありますか？

高橋：自分をさらけ出してアピールしてほしいなと思います。「●●に詳しいです」とか「議論できます」なども重要な要素ですが、人柄を知りたいところが大きくて。そのために座談会や個別相談会といったコミュニケーションの機会を設けているので、あまりカチコチにならず、気軽に話しかけてほしいですね。(笑)

頻繁に話しかけに来て欲しい。

高橋：そう。説明会などが終わったあとに話しかけてくれる人がいますが、採用担当としては嬉しいですね。会話が増えれば自然とその学生さんに対する印象や知識は増えていきますので、我々もなるべく接点を増やして行きたいと思っています。学生の皆さんはためらわず、ハングリー精神で色々話しかけてほしいなと思います。

田中：私の場合ですが、学生の時留学していたこともあって、就職活動を開始した時期が遅く、国土交通省のイベントに初めて参加できたのが年明け以降でした。準備期間が少なかったため、「**イベントで1回は手を挙げて、絶対に質問をする**」と決めていました。かっこいい質問である必要はないとっていて、質問をすることで自分はこういったことに興味があります、とアピールをしていました！

高橋：ただ聞いて終わるだけではなく、例えば自分で「聞き終わったら講演者が採用担当に一個質問してみよう」というルールを作っておけば、質問内容を考えながら話を聞くこともできる。それが話を理解することやアウトプットの練習にもなると思います。講演者側からしても、質問がたくさん来れば来るほど、自分の言葉が届いているのだと実感でき、双方にとって良いイベントになると思います。



夏からイベントに参加する人や、官庁訪問から初めて国交省を訪れる人もいます。最後に、お二人から学生にメッセージをお願いします。

田中：これまでに話した内容と重複してしまいましたが、誰もが職業選択をする時はすごく悩めますし、不安になるかと思っています。なので、後悔しないように色々を見て判断してほしいなと思っています。これからも様々なイベントがあるので、是非参加してみて、納得のいく答えを出してください！

高橋：民間就活は早期化していて、周りの学生さん達がどんどん就活を終える中で最後まで残っているのが官庁志望者。そういった意味でも、「**自分のやりたいことは国家公務員じゃないとできないことなんだ**」という熱意を固めてほしいなと思っています。いろんな国家公務員の話の聞いたり、民間就活をしたり、そういった中でやっぱり国で働きたいという気持ちを固めてもらったら良いと思う。あとは周りの仲間たちも物凄く大事だと思います。面接カードを添削し合うだとか、官庁訪問期間中も支え合える仲間がいることってすごく大事だと思いますので、田中さんが言ってくれた採用担当とかへの熱意の見せ方・アピールといったところに加えて、**学生さん同士の絆とか繋がりみたいなものも是非強くしてほしい**なと思っています。

ありがとうございました。

官庁訪問を乗り越えるために!



原課訪問や人事面接で...

職員さんとの思い出

- 自分の考えを褒められたり、ぜひ来てほしいと言われたりすると、とても嬉しかった。
- 面接官の方が、長々と喋ってしまった志望動機を、真剣に丁寧に聞いてくださった。
- 志望動機を多くの場面で話したため、話すことに慣れていくだけでなく自然と内容が煮詰まっていた。
- 原課訪問で指定された場所が分からず廊下をウロウロしていたら、通りがかった職員の方が優しく案内してくれて緊張がほぐれた。あとで「あの職員さんは、うちの局長だよ」と教えられ、非常に恐縮した。
- 職員さんの前で泣いてしまった。一緒に泣いてくれたり受け入れてくれたりする優しさを、会った職員の方全員から感じた。

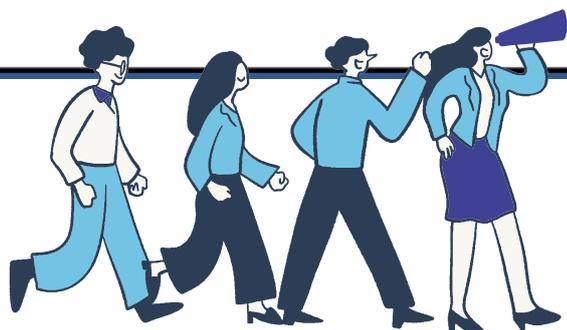
やらかしてしまった!

- 面接場所の中央合同庁舎2号館と3号館を間違え、総務省のフロアに迷い込んだ。
- 入口面接において、職員の方がブースの中にいるのに、気づかず部屋の前で待機していたため、開始時間に遅刻した。
- 面接会場の前で緊張して固まっていたため、見かねた案内担当の職員の方から「一旦深呼吸しよう」と言われた。
- 面接中に、言葉が詰まって出てこなくなり、面接官の方に代弁してもらった。
- 出口面接で原課訪問の振り返りをする最中、職員の方の名前をド忘れして、名刺を確認する羽目になった。
- 人事面接で、国交省の志望動機を語るべきところ、他省庁の志望動機を縷々演説してしまった。

待機時間中に...

緊張したけど...

- 控室において、周りの人達の頭が良くて不安が溢れたが、彼らとの人事面接の情報共有は欠かさなかった。待合室での会話が、自分の志望動機を補強することになった。
- 本を読んだり研究の作業を進めたり、面談で得た情報や自分の考えを整理したりする時間にしようと考えていたが、学生同士の雑談で時間が過ぎていった。結果、緊張感を和らげたり、情報交換をしたりするという意味では、楽しく良い時間となった。
- 名前を覚えるのが結構苦手なので、会った方の名前・部署・役職・説明していただいた業務内容等をセットで覚えるよう心がけた。また、すぐにその組み合わせが口から出るように、待ち時間に何度も思い出す練習をしていた。
- 原課訪問と人事面接の終了から出口面接までかなり長い時間あって緊張が全く解けなかったが、近くにいた複数の内定者たちと雑談や言葉遊びゲームをするうちに徐々に緊張が緩んでいった。
- 他省庁を訪問している知人と連絡を取り合って互いの状況について情報交換していた。
- 緊張で食欲がわかないときは、持ってきたお菓子を食べていた。
- お昼休憩以外はいつでも呼び出される可能性があるので落ち着けなかった。
- 2号館と3号館に、複数の飲食店や売店があることは知っていたので、毎回どこでご飯を食べるか考えるのは少し楽しかった。入省後のイメージを膨らませる意味でも、できるだけ多くの店舗を巡ろうと心がけた。
- 待機室での待機時間が長く、疲れと不安が両方来てしまった。
- 待合室の職員が想像以上にフレンドリーだった。



4 国土交通省の 魅力



1. 内定者が思う、国土交通省の魅力・・・ pp.61~62
2. 執筆担当者が思う、国土交通省の魅力・・・ pp.63~64

国土交通省の魅力

業務やキャリア



所掌の広さ

- 目の前の業務が、国内（都市・地方）、海外すべてに関係している面白さ。
- 各国大使館や海外出張、留学、地方出向など、霞ヶ関の外に出る機会が豊富で、キャリアパスが多様！
- 非常に幅広い政策分野を所掌しているため、多様な問題に対して多様なアプローチをとることができる。
- 生活を守ることから、生活を発展させることまで幅広く関われる。

働きがい

- 国民の生活に直結しているからこそ、政策が目に見える形で結果に結びついている確かさがある。
- 自分自身もいち国民として、生活者の目線から考えることができる。
- 防災・減災政策によって、地域の命を救う。
- 福祉政策という自分の関心分野に携わることができる。
- 国民の生活と命を背負う使命感を持って仕事ができる。
- 最先端の技術と既存制度の改革の両軸で活気ある社会にできる。

組織として

国交省の職員



- 多様な興味関心とバックグラウンドを持った方がいる。
- 国民の暮らしを守ることに誇りと熱量を持ち、温かく接してくださる職員の方が多いところ。官庁訪問期間中も訪問者に寄り添う姿勢が印象的で、それがひとつの決め手になりました。
- 柔らかさ、親身さ。
- 正解のない課題に対して、多くの関係者と一緒に最適解を追求する姿勢。
- 先輩後輩、同期との確かな繋がりの中で、組織として協力しあって業務を進めていくという風土が強く感じられて、入省後も長く働いていくことができそうだと改めて実感した。

国土交通省の魅力

内定者2名が国土交通省の魅力を語ってくれました。
採用イベントや官庁訪問を経て思う、国土交通省の魅力を是非ご一読ください！

くりたろう（1日目訪問）

相互に関連する幅広い所掌分野と、その総合的な活用による暮らしへのインパクトの大きさ。これが国土交通省の最大の魅力ではないでしょうか。私は当初、都市・交通政策を通じたより豊かに暮らせる社会の実現に惹かれ、国土交通省を志望していました。説明会やワークショップに参加する中で気づいたのは、国土交通省の幅広い政策同士の有機的な繋がりです。

例えば、「より豊かに暮らせる街」を実現したいとして、どのような政策が関わりそうでしょうか？ まず思いつくのは都市計画や建築関連の制度、官民連携まちづくりといった政策です。しかし、街は商業、業務、居住などの機能と、それらを繋ぐ交通ネットワークからなる広域的なシステムの一部として成り立つものです。国土計画的な観点も用いれば、より広い視野から、その街と国土全体にとってより良い政策立案ができそうです。

さらに時間軸を広げてみるとどうでしょう。人口減少も背景として、街に不可欠な上下水道、道路、港湾といったインフラの維持管理が全国で課題となっています。コンパクトな市街地の形成や、既存インフラの最大限の活用、維持管理の効率化まで意識した政策立案を行えば、将来にわたってより豊かに暮らせる街を実現できるかもしれません。

この他にも、経済活動を活性化できる観光や、心の豊かさに貢献できる公園・緑地、あらゆる生産・消費活動を支える物流など、「より豊かに暮らせる街」という1つの目的の達成にも、国土交通省のあらゆる政策が関わってくることがわかります。国土交通省の一員となって様々な部局を経験し、これらの幅広い政策の知見を持つことを想像した時、それが「都市・交通政策を通じた、より豊かに暮らせる社会の実現」を目指す上で最も理想的な姿であると考え、私は国土交通省を志望しました。

目に見える物のほぼすべてが所管である。説明会で聞かれたことのある言葉かもしれませんが、これらの相互に関連する政策の多くに共通するのは、日々の営みを舞台として、国民の暮らしに直接影響することです。幅広い所掌分野を持ち、それら全てを用いて国民生活に直接インパクトをもたらせること。こういった魅力に少しでも興味を持って頂けた方は、説明会やワークショップ、Day Outなどのイベントに参加し、国土交通省のさらなる魅力を見つけて頂けると幸いです。一つ一つの政策や職員の方のお話から、ご自身にとっての魅力が見つかると思います。





ちーさん（2日目訪問）

国土交通省は、建物や道路、上下水道、河川、自動車、公共交通機関など、我々が毎日に目にしている、利用している基幹インフラに関する政策や業務を所掌しています。しかし、国土交通省の所管分野はこれにとどまりません。職員や志望者の間で『国土交通省は幅広い分野を所管している』とよく言いますが、その理由の1つに外局の管轄分野があると考えます。経済活動に大きな影響を与える観光庁、軍事的安全保障や防衛と密接に関連する海上保安庁、災害時に国民の生命の安全を左右する気象庁の業務は特定の基幹インフラそのものにアプローチするよりもむしろ、基幹インフラというツールを上手く活用し、何かしらの理念を実現しており、ここに幅広さがあるのではないのでしょうか。

さて、私が国土交通省を志望した最大の理由は、「国民一人一人との距離の近さ」にあります。官庁訪問直前までは、真の国民の利益を追求することができると考え財務省も志望していました。しかし官庁訪問を経て、国土交通省こそが諸々の具体的な政策や業務を通じて、実質的に国民一人一人に寄り添うことのできる職場であることを認識し、結果的に国土交通省を第1志望とするに至りました。

国土交通省の所管する社会資本は、あらゆる社会活動及び経済活動にとって最も不可欠な基幹的要素であり、国民にとって最も身近な安全にも関わるため、国土交通省の政策は日本に住む全ての人々の生活に直接的かつ重大な影響を与えます。

一方、我々の生活を支えるそのような「インフラ」に関して、何かしらの利便性の欠如を感じた経験がある方も多いのではないのでしょうか。皆さんの周りに存在する「インフラ」のほとんどを所管している分、老朽化問題や利便性問題など、国土交通省が今後向き合わなければいけない課題は山のようにあります。それらの課題に対処する際に、国土交通省の職員は、日本で生活する一人一人がどのような境遇に置かれているのかを具体的に想像し、把握しなければなりません。皆さんだけでなく、子供や老人など、現状の社会基盤を以って生活することが難しい国民がたくさん存在するうえで、彼らの置かれている状況は当然人によって異なります。彼ら一人一人の声に真剣に耳を傾け、それにより明らかになった問題一個一個に職員一同で立ち向かっていくことこそが、国土交通省の使命なのです。そのような意味で、国土交通省は国民一人一人との距離が最も近い省庁といっても過言ではないでしょう。

今日、日本では少子高齢化及び人口減少が深刻化しつつあり、労働者及び生産年齢人口も減少傾向にあります。しかし、国民生活の根幹たる社会基盤は老朽化が進む一方です。そのため、新たに社会資本を増やすことよりも、社会保障費等の膨張により社会資本関連支出の制約が継続するなかで、今日の国民の生活を支えている既存の社会基盤の「新陳代謝」に対し、どのように人的・金銭的リソースを割くのが今後の国土交通省の最大の課題の一つであるといえます。身分や立場に関係なく職員同士が互いの知見や経験を積極的に共有しながら、答えのない難しい課題の最適解を真剣に追求していく仲間が今後は必要になるでしょう。もしこの文章を読んで少しでも国土交通省の使命に魅力を感じた方は、ぜひ国土交通省を目指してみてください！



国土交通省